

ハリーポッターと白銀のチート主人公

神崎八雲

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

伝えられた予言は2つではなかった。

—— 『六つ目の月が生まれるとき、純血に、白銀の子供が生まれるだろう』 『彼の者は、家族の命と引き換えに闇の帝王から生き延びる』 『そして彼の者の判断で、【生き残った男の子】の運命は変転するだろう』

そしてその予言の子供は——

白銀の子供を中心に世界は大混乱？

いやいや大丈夫だよ、どーにかすれば。

- ・ 主人公原作知識あり
- ・ ほぼ、チートな主人公

1981年6月1日 白銀の子供の運命が変わる

「ハッピーバースデー！・レイラー！」

—— そう祝ってくれる家族はもういない

「これで1歳かあ。早く一緒に学校に通いたいなあ」

—— そう言ってくれる兄ももういない

あの日、私の誕生日の日に私達の家族は【闇の帝王】に壊された。

目次

プロローグ

家族を殺された予言の子供 | 1

ユオハーゼ家の当主

パーティーへのお誘い | 5

友達ができました | 9

ハリーとダドリーとの出会い | 18

親戚の死 | 22

血で染まった館 | 29

私の居場所 | 33

双子と少女 | 39

賢者の石 編

ダイアゴン横丁 | 49

杖との出会い | 58

9と3／4番線の旅 | 62

組分け儀式 | 80

禁じられた森の動物達 | 89

変身術と魔法薬の授業 | 93

飛行訓練と真夜中の決闘 | 105

ハロウィーン 前編 | 118

ハロウィーン 後編 | 128

医務室 | 137

クイディッチ | 147

クリスマス休暇 前編 | 158

クリスマスパーティー〜マルフォイ家〜 | 171

みぞの鏡



179

ハグリッドのドラゴン



189

減点と罰則と動物と



199

プロローグ

家族を殺された予言の子供

1981年6月1日

「ケイ！レイラをつれて逃げろ！」

そう叫んだ父が緑の閃光で倒れる。

「早く行って!!」

ケイの背中を押し、裏口から出した母が父と同じように緑の閃光で倒れる。

「うっ、、、うわああああ!!」

まだ13歳の兄、ケイが1歳になったばかりの妹、レイラを抱えて走る。

だが、その背中にも緑の閃光が当たった。

ドサツ

ケイが崩れ落ちるが、それでも妹を離さない。

そこで、レイラの記憶は途絶えた。

——なぜ、闇の帝王はレイラを殺さなかったのだろうか

それは未だに分かっていない。

レイラは世間一般で死んだと思われていた、、、。

——その後、買い物から帰って来た屋敷しもべ妖精のエリシヤがレイラを見つけてくれた。

家が燃やされていたため、別荘に移動したレイラはエリシヤに育てられていた。

そこで私は強く決意した。

生き延びるためには、魔法をたくさん学ばなければ。

入学までにある程度強くなって自衛できるようになればいい。いまはまだベッドに寝るだけの赤ん坊だが。

それで、エリシヤを守る。

もう家族を殺されたくない。

あの事件から4年後、私達の家で叔父と名乗る人がやってきた。

「ここに居るレイラ・ユオハーゼを引き取りに来た」

叔父は自分をレオン・ユオハーゼと名乗った。

そして、そのまま私達は叔父にユオハーゼ家の館に連れていかれた。

叔父から教えてもらったこと、それはユオハーゼ家が純血主義一族だということ。私の父が元当主で、純血を重んじるのを嫌い、闇の帝王に齒向かった結果、殺されたということ。

そして父、兄が死んだ今、私が現当主だ、ということ。

他にもユオハーゼ家の特徴として、太陽の光を嫌い、闇に生きる家系ということ。魔法を使える人と、体術に特化し、魔法は少しだけ使える人がいるということ。

そして数年に一度、魔法と体術、両方を100%使える人が出てくるということ。それが私だということ。

ある意味最強の戦闘種族だな、オイ。

「お前は私が責任を持って育てる。ユオハーゼの名に恥じぬよう、しっかり努力するのだよ」

叔父は優しい人だった。その分、勉強を覚えてくれる時とのギャップが激しかったのだが。

はい、3年が経ちました。

思えばこの3年、魔法や体術の勉強ばかりしていた。食事や風呂、睡眠以外はそれしかしていない気がする。杖は叔父の予備用の杖を貸してもらった。勉強のための本はそれこそどっさりあった。おまけに強くならなくてはこの危機感、魔法の才能も戦闘の才能もあるらしいこの身体、そして何より元一般人としては魔法や体術の勉強は楽しく、勉強をしている気がしなかったのだ。

この自重なしのスパルタ教育の結果は……まあ、やりすぎた。絶対やりすぎた。こんな8歳いたらヤバイ。ホグワーツで7年生までにならう呪文や魔法薬、知識などの類は完璧といってもいい。自分で作った呪文もいくつが存在する……ホントに8歳か？

7年生どころか、今なら叔父にも負けないほど強くなった。体術の方は今なら片手で巨大な岩を割れる。

「流石に恐ろしいな……」

「同感です……」

自分の戦闘能力に私だけでなく、エリシヤや叔父も驚いていた。

ユオハーゼ家の当主
パーティーへのお誘い

草木も眠る丑三つ時、私と叔父は向かい合って体術の修行をしていた。

その修行の合間に叔父が聞いてきた。

「何歳になった？レイラ」

「8歳です」

「ふむ、じゃあそろそろだな」

「…？なにが、ですか？」

ふと、手を止めた私は叔父のほうを見る。すると、

「隙ありだ」

ドカツ

蹴り飛ばされてしまった。

ドボオーン

「いてて、」

近くにある池まで飛ばされた私は、ずぶ濡れになりながら池の淵に手をかける。

「今日はここまでにするか」

叔父に手伝ってもらいながら何とか池から上がると、タオルを渡された。

「ありがとうございます」

そう言えば私、今杖持ってなかった。

借りたタオルで顔をふきながら、私達は家に戻る。

「ただいま帰りました」

「お帰りなさいませ、お嬢様」

ドアを開けると、エリシヤがサツと現れた。

「また、池に落ちたんですね」

「落ちたんじやなくて落とされたんだよ」

そう言うのとエリシヤがフフ、と笑う。

「お風呂準備しておりますので」

「ありがとうございます、エリー」

エリシヤにタオルを渡して、風呂へ行こうとしていた時だった。

「あ、そうでした。ご当主になられたのですね、お嬢様」

「……………え？」

イマナンテイツタノ？ゴトウシユ??

「おめでとうございますーエリシヤはとても嬉しいです」

「……………ウン、アリガトウ」

そう言いながら、私はジロリと叔父を見る。

「叔父様？どういうことですか？」

「そういうことだよ。今日からお前はユオハーゼ家の当主になった」

「……………私まだ8歳ですよ？他にも親戚の方々がいるのではないのですか？」

ため息をつきながら私が叔父に言うと、目をそらされた。

「親戚の奴等は何年か前に全員殺された」

「そうでしたか……………」

なにか裏がありそうですね……………

ふと、そんな事を思った私が考え込んでいると、

バサバサツ

灰色のフクロウが私の肩に止まった。

その足には1つの手紙がくくりつけられている。

「何ででしょうか？」

慎重にフクロウの足から手紙を外して叔父に渡す。

この家での約束だ。

叔父が手紙を開いて読み始める。すると、懐かしそうに笑みを浮かべた。

「さすが。ルシウスと言うべきか、、、、情報が速いな」

そう言った叔父が手紙を私に見せる。

そこには丁寧な字でこう書かれていた。

レイラ・ユオハーゼ殿

この度は、ご当主への就任、誠におめでとうございます。

純血名家の復帰とありまして、喜ばしい限りでございます。

さて、もうすぐ私が主催を務めさせていただく新年のパーティーが開かれます。

よろしければこれを機に、純血名家の挨拶をされるのは如何でしょうか。

お返事をいただき次第、招待状を改めて送らせていただきます。

日時は、一月一日の午後六時から。場所につきましては、招待状に詳しく書かせていただきます。

いい返事を、お待ちしております。

マルフォイ家現当主 ルシウス・マルフォイ

私は、叔父の目を見た。

「、、、、」

無言で頷いた叔父を見て、私はすぐに羊皮紙とペンを手に取り、承諾の手紙を書いた。そして、それを静かに見守っていた、灰色のフクロウに、手紙を渡すと、バサバサと飛び去って行った。

「エリー、準備頼めるか？」

「はい」

「任せた」

流石に寒くなってきたな。

私は急いで風呂に向かった。後ろでこんな会話がされていることを知らずに。

「レイラ用の服は男の服準備してくれるか？」

「はい、、、、。何故、でしょうか？」

「レイラは男の子として世に発表する。アイツがホグワーツに入った時にユオハーゼの当主の名が邪魔しないように自分らしい生活が送れるようにするためだ」

友達ができました

「、、分かってるな、お前は今男の子だ」

「分かってます、ご配慮いただきありがとうございます」

ギキイ

ここはマルフォイ家。

私は男の当主。

開かれた扉から見えたのはきらびやかな衣装を纏う人々で賑わうパーティー会場。

皆、談笑という名の気の張り合いをし、ほとんど気疲れパーティーと化している。

めんどくさいですね、、、

私はそんなパーティーに出席しているのだが、子供達の輪に入ることも、大人達の輪に入ることも出来ず、一人窓際で暇を持て余していた。

叔父は叔父で別の人達と楽しそうに会話している。

さすがに、このまま何もしないのは勿体ない。何より楽しくない。そう思った私は、叔父からそつと離れ、ルシウスを探すことにした。

ルシウスとは、このパーティーの前に予め事情を話し、レイラが子供当主で、女の子だという事は、知っている。だが、知らない客は、どこかのご令息だと勘違いしているためか、誰にも話しかけられなかった。

(ルシウス殿、どこかな、、)

そう考えていると、後ろから声がかけられた。

「ユオハーゼ殿。よろしければ、こちらをどうぞ」

そう言ったのは、他でもないルシウスだった。が、渡されたのは、赤ワイン。

(ワインかあ、ゝ、飲んだ事ないですね)

喉に流し込むと、アルコールに喉が焼けたような感覚がした。

「それにしても、なにかお困りですか?」

「いや、丁度ルシウス殿を探していてな」

そう言う少女をルシウスは見た。

——銀髪に緋色の瞳、透き通るような白い肌。黒を基調としたタキシードを着ている少女は、大人のような落ち着きと威厳を感じさせる。

「?どうかしましたか、ルシウス殿。私の顔に何か付いているのか?」

「いえ、その、ゝ、とてもお似合いだな、と」

「それは、良かった。タキシードなど着たことがないから、似合うか心配だったので」

そう言っって苦笑する少女。こう言う所は、まだ少女なのだなと、改めて感じた。だが、この年であるの、ユオハーゼ家の現当主なのだ。普段なら、年下の少女に頭を下げるなど考えられないが、そうは言っていられない。

と、不意に近くに來ていた叔父がルシウスの名を呼んだ。

「そうだ、ルシウス」

「なんですか？レオン」

「良ければ、君からこの子を紹介してもらうことはできるか？ステージかなにかで」

いきなりの申し出にルシウスは少し驚いたが、元クラスメイトとはいえ、今はユオハーゼ家の後継人だ。逆らうなどということは論外だ。

「かしこまりました。少々お待ちを」

ステージの方へかけて行くルシウス。その背中が見えなくなる
と、私は軽く叔父を睨んだ。

「私は目立ちたくないのですが」

「だか、家を出る前に『お嬢様が、表に出られるいい機会を、無駄にしては行けません！』と、エリシヤに釘を打たれてしまったら？」

「それはそうですが、、、」

「それに見ている限り、お前ずっと一人でいたよな。この機会に友達作ればどうだ？」

「、、、分かりましたよ、、、」

まったく、、、私は目立つのはとても苦手なんです。

軽いため息をついた私のところに、準備が整ったらしく、ルシウスが来た。

「お待たせしました。それですね、、、」

簡単に段取りを話すと、ルシウスが先にステージに上がって行った。

「ソノーラス《響け》！」

ルシウスの声に、流れていた音楽が止まり、客の目が一気にステージに集まった。それを確認したルシウスは、続けた。

「本日はお集り頂き、ありがとうございます。毎年、開催しておりますこのパーティーですが、今日は特別な、ゲストをお呼び致しました。では、こちらへ」

「特別？」「そんなに凄い人なのかしら？」「どなたかしらね？」などと、会場がざわつく。客同士顔を見合わせる者もいた。

「ユオハーゼ家の威厳を見せてやれ」

小声で叔父に言われる。

「分かりました」

会場がざわめく中で、真っ直ぐステージに向かう少女、いや、少年がいた。

コツ、コツ、

あまり大きな音ではないが、ざわめきが、少しずつ収まっていく。

コツ、コツ、コツ、

音と一緒に少年の白銀の髪が小さく揺れる。

コツ、コツ、コツ、コツ、

その少年がステージにあがり、ライトが照らす。

——誰もが、息を呑んだ。

会場全体を覆い尽くす、圧迫感。誰一人として微動だにできなくなった。たった一人の少年が、ここにいる何百人の人々を、ただ歩くだけで支配し尽くしている。

ルシウスは、身震いをした。

死喰い人として、『例のあの人』の恐ろしさに耐えてきた自分が、たった一人の少女に動くことさえ、制されている。

そして、空気が揺れた。

「私は、レイ・ユオハーゼ。この度、ユオハーゼ家当主の座に就いた」

静寂の中、凜と話すその姿が皆の瞳に映る。

「まだ子供の私が当主になったのには訳があるのだが、皆思い付く節はあるだろう。だが、私はここで全てを語る気はない。最後に、ユオハーゼ家が社会復帰する場を設けてくれた、ルシウス・マルフォイ殿に、礼を言う。」

少年がステージを降り、ルシウスの前に立つ。

「、、ありがとう」

ルシウスを見上げる少女は、年相応の笑みを浮かべた。

(恐ろしい少女だ、、)

ルシウスは、不意にそう思った。

音の戻った会場で、レイラはたくさん大人の達に囲まれていた。

「ユオハーゼ殿は、どこにお住まいで？」

「それは、ごく、、、、」

「ユオハーゼ殿——」

「なんですか？」

「ユオハーゼ様——」

「そうか。それはな、、、、」

(こうなるから嫌だったんだよ、、)

めんどくせえ、、、、と、その時。客の間を縫って、白髪の少年が現れた。

「お前が、レイ・ユオハーゼか？」

「そうだが」

、、、、、こいつはドラコ・マルフォイだな

「何かようか？ドラコ殿」

私がドラコの方に向き直ってそう言うと、彼は驚いた表情をした。

「何故僕の名前を、、」

「有名なマルフォイ家の、次期当主になろうというお方の名前を覚えていないほど、僕は落ちぶれていませんよ」

そう言つて柔らかく微笑むと、ドラコは照れたようにそつぽを向いた。

「ユツユオハーゼ殿、あちらで僕達の会話に加わりませんか？ ついでに色々紹介しますよ」

「ありがとう。僕も友達が欲しかったんだ」

ドラコについていくと、

「ドラコ、その方はユオハーゼ殿ではないか」

「一体どうしたんだ？」

まあ凄い。後のスリザリンの方々がたくさんいた。

「レイ・ユオハーゼだ。皆と友達になりたくてドラコ殿に紹介を頼んだ」

そう言つと、慌てて深く礼された。

「ユオハーゼ殿、あちらがセオドル・ノットだ」

「よつ、よろしくお願いします、ユオハーゼ殿」

「ああ、よろしく」

セオドルと握手しようとして手を出すと、驚いたように震えながら握手してくれた。

「あちらが——」

楽しい時間はあっという間に過ぎてしまった。

「今日はとても楽しかった。またパーティー、呼んでくれよ？ドラコ」
「呼ぶに決まってるよ、レイ」

お互いを呼び捨てで呼ぶまで仲良くなれた。
この世界では初めての友達だ。とても嬉しい。

「おっと、忘れてた」

帰ろうと、踵を返した私は叔父に言われていたことを思い出した。

「僕にはドラコと同年の妹がいるんだ。ちよつと、変わっているが、
ホグワーツでは仲良くしてやってくれ」

「OK、じゃあ待たな！」

「じゃあな！」

……、まあ、その妹っていつてる奴、私なんだが

ハリーとダドリーとの出会い

6月1日

今、私は9歳。日に日にホグワーツに行ける日が近づいてきている。

感激で涙が出そうなレイラに、叔父は

「隙あり」

と言って武装解除の呪文をかけてきた。結構強力な。

そして、また池とご対面する羽目になった。

せつかくの誕生日なのに、。

そして、今。レイラは家にあつた箒に乗りながら、イギリスの町をブラブラしている。勿論、自分と箒には目眩ましの呪文をかけて。

「さて、ここはどこでしょうか」

飛んでいるうちに現在地が分からなくなった。

スタツ

箒から降りたレイラは自分にかけてある目眩ましの呪文をといた。そしてキヨロキヨロと辺りを見渡して地図を探す。

「ふむ、ここはプリベット通りですね」

じゃあ、意外と近いじゃないですか……。しかしプリベット通りとは、何処かで聞いたことがあるような、。

そう思つて記憶を呼び戻そうと眉間に手を当てていたレイラの耳に聞いたことのある名前が、。

「クソツ、ハリーの奴何処行きやがったんだ？」

「逃げ足の速い奴ですね、ダドリーさん」

ダドリー？あつそうだ、ここはハリーがいるプリベット通りですね。ていうことは、アイツはダドリー軍団の、、、。

我らが主人公を苛める奴には少しお灸を添えなければ。

「すみません」

スツとダドリーに近づいたレイラ。そして全力スマイルを見せる。

「なっ、、、、！」

ダドリーの顔がポツと赤く染まっていく。

フツ、これでも私は美少女の方でしてね。（自分で言うのもなんだが）

「あの、ハリーとはハリーポッターのことでしょうか？」

「あっ、、、、そっそっそうです」

何でしょう、、、赤く染まっていくにつれて何かに似ていつているよ
うな、、、、。

あ、豚だ。

「私、ハリーの親戚のレイラ・ユオハーゼと申します。いつもハリーが

お世話になっております」

そう言つて深々と礼をする。

一応私純血だし、ハリーと血の繋がり位あるでしょう。多分。

「ぼつ僕はダドリー・ダーズリーと言います」

「最近のハリーどうでしょう？苛められたりしていませんか？」

ダドリーの肩がビクツと反応する。

「もしハリーを苛めている人がいたら、ハリーを助けてやって下さいね。よろしくお願いします」

キラキラとした営業スマイルの様な笑みを浮かべると、凄い勢いで首を縦に振られた。

「じゃあ、私はこれで」

再び礼をして、その場から立ち去る。

フツチョロい。

完全なる悪役の笑みを隠そうともせずに行くレイラ。
すると、目の前の公園のブランコにハリーの姿が。

本当に酷い暮らしをしているのですね、、

そう思いながらハリーを見てみると、目が合った。

ペコッ

一応笑みを浮かべて礼をすると、一瞬戸惑ったような表情をされた

後、ハリーも礼をしてくれた。

何カ月か後にまた会いましょう、ハリー・ポッター。
その時私を覚えていたらあなたは天才ですね。

それから、ハリーに対するいじめは少しずつ無くなっていったよう
だ。

当のハリーはとても困惑したが、いじめが無くなって嬉しそうだっ
た。

親戚の死

その時、私は家にいなかった。
何故いなかったのだろう。今さら悔やんでももう遅い。

私はまた家族を失ってしまった。

2時間前

「叔父様は純血主義ですか？」

ふと、レイラは口にした。

「私か？ そうだな、、、」

叔父は考え込むように眉間に手を当てた。

ユオハーゼ家の癖なのだろう。レイラも考え込むときは眉間に手を当てている。

十分考え込んだ後、叔父は答えた。

「いや、私は純血主義ではない。お前の父親よりだよ」

それを聞いてレイラは安心した。

「よかったです」

「何故だ？」

「私も純血主義ではありませんから」

そう言うのと叔父は驚いた表情をした。

「では何故マルフォイ家のパーティーに行ったんだ？」

「表向きは『純血主義』ですから。それと、闇の帝王側あちらがわとはいえ、仲良くしといて損はないでしょう？」

「確かにな、」

——この会話が災いと呼んだ。

あの会話の後、レイラは修行の一貫で山へ走りに行っていた。エリシヤを連れて。

そして、帰ってきたときには、……

「家が、……」

8年前と同じような光景が眼前に広がっている。
家は修復が不可能なほど燃え、近くの木にも飛び火が移っている。

レイラはさつきから気配の量が多い、家の裏口側へ走った。

嫌な気配だ。まるで、、、闇に染まっているような。

「エリー！ダンブルドア先生に報告に行ってください！多分これは【死喰い人】の仕業です！」
すぐさまエリシヤに指示を出す。

「ですが、お嬢様は、、、？」

「私は叔父を探してくる。手遅れにならないうちに」

そう言うがエリシヤはなかなか行こうとしない。

「、、、でっですが、、、」

「早く行け！」

「——ッ分かりました」

バシッ

エリシヤが姿くらましをした。

これでエリシヤだけでも助かるだろう。

一応杖を構えながら走ったその先には、

「アバダ・ケダブラ 《息絶えよ》」

緑の閃光が闇の集団の真ん中にいた人に当たる。
その人物は、レイラによく知る人だった。

「お、、、じ、さま、、、？」

全てがスローモーションで見える。

ドサツ

「フンツ、純血の身でありながら【闇の帝王】様に逆らうからだ」
音が全身に戻ってくる。

「あ、あああ、、、」

心臓があり得ないくらい速く動く。
レイラの手から杖が滑り落ちた。

「う、ああ、、、」

ユオハーゼ家特有の白い肌は、ほとんど外傷がない。長い睫毛で縁取られた瞼はぴくりともしない。乱れた髪が額や頬にへばりつき、顔色を失った死に顔は驚くほど安らかだった。

「うああ、、、 ああああ、 ああ、、、」

掠れた声が自分から絞り出されたものだ、レイラは意識できずにいた。心が死んでいくようだった。音も視覚も何もかもが失われていく。これ以上見てはいけないと叫ぶのに、目をそらせなかった。

護れなかった。その事実がレイラの心を引き裂いた。

「む？ 貴様はユオハーゼ家の当主、レイラ殿ではないか、こんなところで何を、、、」

グチャツ

レイラに近付いた【死喰い人】の1人から、魔法ではあり得ない音がする。

白く透き通るような小さい腕が【死喰い人】の体を貫通していた。突き出た腕は真っ赤に染まり、ぐちゃりと背筋の凍るような音を立てているのは臓物だろう。

「なっ何を、、、」

ズボツ

【死喰い人】の体から手が抜かれる。その【死喰い人】はヒューヒューっと浅く呼吸をしながら倒れて息絶えた。

「貴様ア！」

別の【死喰い人】が魔法で攻撃してくるが、その呪文を唱える前にその【死喰い人】は首をはねられた。

その時、周りにいた【死喰い人】達は見た。

10歳にも満たない少女が【死喰い人】《なかま》を殺しているときの顔を。

レイラの顔には狂喜に心酔する笑顔が張り付いているのだ。目はかつ開びらいて瞳孔は開き、にたりと無理やり上げられた頬の筋肉はビキビキ鳴った。

「う、うわああああ!!」

我先へと逃げ出す【死喰い人】達。それは当然だ。まだ幼い少女が人を苦しめて、殺して、そして狂喜の笑みを浮かべているのだから。魔法ではあり得ない苦しみを与えているのだから。

グチャツ

視界が真っ赤に染まった。

血で染まった館

血、血、血。

辺り一面がどす黒い血で染まっている。

ここは、元々大きな館が建っていた。だが、それは今、跡形もない。

かすかに残る燃えカスの臭いをも、全てを呑み込みそこにあるのはただ、死でしかない。

そんな場所にダンブルドアは来ていた。

視界を覆い尽くす鮮血。切り裂かれ原型を無くし、辺りに散らばった人体。肌を刺す様な寒気。鼻をつくような嫌な臭い。まさに、血の海という言葉がふさわしい場所。近づいてはいけないと、本能が警報を出していた。

「一体何があつたんじゃ、、、」

あのダンブルドアも戦慄するような、まさに地獄のような光景がある。

「お嬢様、、、お嬢様は何処へ、、、？」

屋敷しもべ妖精のエリシヤが震えながら自分の主、レイラ・ユオ

ハーゼを探す。

見た目では判断できないような骸が散乱しているその場所。血の海の真ん中で1つの影が立ち尽くしていた。

「お嬢様、、、？」

一歩足を踏み出したエリシヤは途端に、とてつもなく巨大な殺気に襲われた。

慌てて足を引つ込めるとその殺気は感じなくなる。

その時、立ち尽くしていた影が顔を上げ、エリシヤとダンブルドアを見つめた。何も写していない虚ろな瞳で。

その少女の綺麗だった銀髪は今はどす黒い血に染まり、透き通るような白い腕は両方とも血を滴らしている。

その瞳は紅く、血の色をしていた。

「レイラ、、、」

ダンブルドアが歩き出した。その途端、虚ろだった瞳が殺気を帯びた ” 獲物を狩るもの ” の目になる。

だが、次の瞬間その顔は、今にも泣き出しそうに歪んだ。

「まも、、、つれなつ、、、かった、、、。わたしは、、、つよく、、、な、んて、、、つなかつた、、、どうしよう、、、っ、、、ころし、、、っちやつたよ、、、ひとりに、、、なつちや、、、つたよお、、、」

レイラの足元には綺麗なまま、叔父のレオンが横たわっている。

「うああ、、、つあああ、、、あああつ、、、」

まずい、心が壊れかけている。

そう思ったダンブルドアが焦って駆け寄ろうとした時だった。

「お嬢様！」

エリシャがダンブルドアよりも速く近付いて、レイラの手をとった。

「、、、つエリー、、、」

「大丈夫、大丈夫です、お嬢様」

優しく、血に濡れているレイラの手を撫でる。

「、、、ひっぐ、、、つく」

レイラの紅い瞳から雫が落ちる。

「大丈夫、大丈夫。お嬢様は一人ではありません」

「、、、つく、、、えつく、、、」

「私がいますから」

「うん、エリーがいる」

でしょ？、と微笑んでそつと手を撫でるエリシヤと、泣き止もうとするレイラ。まるで、母子だ。

その様子を見てホツとしたダンブルドア。どうやら、レイラは闇に染まらずに済んだようだ。

しかし、たった9歳の少女が素手で魔法を使う大人に勝ってしまうとは、

状況を把握するにつれ、ダンブルドアの顔は険しくなっていた。

私の居場所

あれから何カ月か過ぎ、冬が過ぎ、春が訪れた。9年目の春だ。

花が目を覚まし、動物が動き出した。暖かい風がやってきた。

『禁じられた森』。ホグワーツ城の敷地内にあり、たくさんの魔法動物が住む森だ。危険な動物もいるために、生徒達だけの立ち入りは禁止されている。

それなのに、10歳にも満たない少女はたった一人でそこに来た。た。

「ケンタウロスさん、またお会いできましたね」

「また来たのですか、少女よ。今日は星の輝きがいつにも増して強い…あなたが来るといつもそうだ…」

遠い目でそんなことを言っているケンタウロスは、自分の縄張りに入ってきた少女を追い出すことはしなかった。

「私がない間、何か悪いこと、良くないことはありませんでしたか？」

「いいや、いつも通りだよ…それでは私はそろそろ行きます」

「ええ、またお会いしましょう」

彼らはいつもこうだ。手短かに話を終わらせて、他人とはなるべく関わらないように生きている。

「さて、そのニフラーさん。私の靴に金属はありませんよ？靴以外なら別ですが」

この子達もそうだ。金属集めが習性の彼らは、金属に目がない。まあ、このニフラーはどうやら金属目当てでは無さそうだが……ふと、肩に軽い重みを感じたかと思うと、ボウトラツクルが私の肩に座っていた。上を見上げれば、鳥達が遊んでいる。

「いつも通り……ですか……」

そう、いつも通りの時間が始まったのだった。

家に帰ろうにも【死喰い人】に燃やされた。
唯一の血の繋がりを持つ叔父は殺された。
護ってくれる人はもういない。

護れなくて悔しかった。
私は自分の弱さに負けた。
帰るべき場所も、迎えてくれる家族も失った。

笑みを浮かべて戦う私を見て、【死喰い人】の誰かが言った。

『鬼だ』

——と。

恐怖に顔をひきつらせながら言った。

『死を喰らう鬼だ』

——と、……。

そんな血に濡れた ” 鬼 ” に声をかけた人がいた。

「新しい家が見つかるまでホグワーツで過ごしさんかのお？」

その人は ” 鬼 ” を恐れなかった。それよりも ” 鬼 ” の中
にいる闇に恐れを抱いていた。

「そっち行っても誰も死なない？」

「ああ、誰も死なない」

こうして ” 鬼 ” は人に連れられ、 ” 少女 ” に戻った。

そして、その少女、レイラ・ユオハーゼはその森に居た。

少しの間で鈍ってしまった魔法を思い出すために。

「みんな、少しだけ離れてくださいね。当たって仕舞わない様に」

いつの間にか集まってしまった動物達に、レイラは声をかける。足
元に居たニフラー。肩に座って居たボウトラツクルも私の言葉を聞

き動き出した。一人も残っていない事を確認して、彼女は呪文を唱えた。

「プロデゴ・トタラム」

もちろん、対象は生き物だ。この魔法を維持しながら攻撃魔法を繰り出し、二つの魔法を操る鍛錬を同時に行っていた。

「エイビス」

杖から鳥が出てくる。

「オ。バグノ」

その言葉で、魔法の鳥が守りの中にあつた木を攻撃した。

気がついた時にはもう日が暮れようとしていた。そろそろ戻らないと、ここに来た事がバレてしまう。

「皆さん、また明日来ますね」

最後まで見届けてくれていた彼らにそう言うと、彼らはうなづいた（ように見えた）。彼らに手を降りながら、レイラはホグワーツへ走った。

「またあの子は、森へ行ったのか？困ったのう…」

ダンブルドアは、森番であるハグリッドの小屋でそんな話をしていた。

「そうなんです。どうやら、動物達もなついちまったみてえで」

「動物達が？」

「へい、あの気難しいケンタウロスも縄張りに入ったあの子を襲わねえんです。それに、普通なら金属に目がないニフラーも、人を警戒するポウトラックルも、他の動物達もあの子の周りで見守ってるんです。あのユニコーンも遠巻きながら見守ってるんですよ」

「うむ…もう少し様子を見ていてくれるかのう。何かあればすぐに対処できるように準備も頼む」

「分かりました。あと、ダンブルドア校長。赤毛の双子がまた森で遊び始めましたんで、注意をお願いしていいですか？」

「あの二人もか？…了解じゃ。マクゴナガル先生に報告しておこう」

「それでは、ハグリッドよ。また近い内にな」

「へい、いつでも大歓迎です」

そう言って小屋を出ると、丁度赤毛の双子が前を横切った所だっ

た。

「ミスター・ウィーズリー達よ」

ダンブルドアが声をかけると、二人とも跳び上がった。そしてギギギ、という効果音がつきそうな速度で振り返った。

「こ、こ、校長先生ではありませんか」

「こ、こ、こんな所でお会いできるとは」

「二人ともどうしたのじゃ？なぜそんなに焦っておる」

二人とも目を泳がせ、チラチラと辺りをみている。

「まあ、よい…じゃがこれからは気をつけるのじゃぞ？」

「は、はい!!」

返事をした二人は慌ててホグワーツへ帰っていった。

双子と少女

「…君、誰だい？」

「…どこから来たの？」

僕は目の前にいる少女に問いかけた。

綺麗な顔立ちに、木漏れ日にキラキラ輝く銀色の髪。

驚いたような表情をしているその顔は、まだまだ幼さを残している。

少しして、彼女は潤んだ唇を開いた。

「…なぜ、森に…？」

鈴の音が、静かな森に響き渡る。

見惚れたか、聞き惚れたか…僕はワントテンポ遅れて、やっと返事をした。

「えっと、それは…」

僕は走っていた。鬼の形相という表現が似合う顔で追いかけてくる、管理人から逃げるために。

「おまえらアーいい加減にしろ!!」

「やなこつた〜」

「ウイイイイズリイイイ!!!」

どうやらフィルチをキレさせてしまったらしい。まあ、いつもの事だ。周りの生徒が白い目で見ながら、「また双子か…」などと話しているが、こちらも同じく。

(そろそろだな!)

(投げるぞ!)

互いに意思疎通し合うと、同時に糞爆弾をフィルチに投げつけた。

「じゃあな、フィルチ!」

「逃がさんぞ!!ゴホ、ゴホ、…くさっ!」

フィルチは煙を吸い込んだのか咳をし、顔をしかめている。その隙に僕は近くの道に隠れた。

生徒達の声がだんだん小さくなっていき、ついに聞こえなくなつた。それを確認した僕達は、足を動かしながら、お互いに声を掛け合った。

「やったな、ジョージ!」

「やったぜ、フレッド!」

お決まりのハイタッチを交わした。

今日はなかなかの偉業を成し遂げた。

というのも、今日はファイルチの管理室に忍び込んで、没収された物を取り返す事が目標だった。

いざ実行してみると、管理室は意外と簡単に忍び込む事ができ、加えて自分達の没収品以外の興味深い品も手に入れる事ができた。

が、浮かれて油断したその時、ファイルチが帰ってきてしまったのだ。どうやら見られなくなかったものがあつたらしく……

まあ、そんなこんなで今に至るわけだ。

「ジョージ、そういうえば、この道って森に行くんじゃないか？」

「…そうかもしれない」

先ほど急いで逃げ込んだため、どこの道か確認し忘れてしまった。

「まあ、着けば分かるさ」

「そうだな、フレッド」

僕らは軽い足取りで前へと進んでいった。

「あなた達、もしかして悪戯をしていたのでしょうか？ファイルチさんを困らせたのですか？」

発せられた彼女の声で、僕らの意識が現実へと戻った。

「ファイルチさん?!」

「な、なんで、さん付け？」

「あいつに、敬称付ける人がいたんだ…」

「ファイルチさん…何か変ですか？」

何かおかしいな表現かしら、と彼女は小首をかしげている。少しして諦めたのか、話を戻した。

「それはさておき。あなた達、やはり、悪戯していたのでしょう？」

「ち、違うよ!!」

「悪戯何で、し、してないよ。ねえ、ジョージ？」

「そ、そうだよ、フレッド。ぼ、僕らは優等生だから、ね？」

「怪しいですね…」

「……」

「あなた達はハグリットが言っていたあの双子ですよ…。」

……そう言えば、お二人はなぜこんな所にいるのですか？ここは、生徒の立ち入りが禁止されているはずですよ」

透き通った青い瞳が、僕らの目を交互に覗き込んでくる。

「…えつ、えつと…僕達、秘密の裏道から逃げて来たんだ」

「そ、そうそう」

「…逃げて来た…？やっぱり、怪しい…」

彼女の整った顔がいつそう険しくなる。

「そ、それで…君は何でここにいるんだい？」

「制服じゃ無いけど、ホグワーツの生徒…？」

「理由は無いですよ。強いて言えば、この森が好きだから、ですかね。

それと私は、ホグワーツの生徒ではありません」

「…そうなんだ…？って、へ？」

僕らは幻聴でも聞いたかと思った。見かけによらず、随分と大胆な事を言う。

「へ？と言われてましても…そのままです」

「せ、『生徒でもありません』って、じゃあ君は誰なんだい？」

「どこから…？というか、いくつ？」

「…えっと、今は9歳ですね…どこからは…うくん、ホグワーツから？」

「…やっぱり生徒？」

「だから違いますって…」

そう言っって苦笑する彼女からは、触れたら壊れてしまうような繊細さを感じられる。黒を基調としたワンピースが、彼女の透き通るような白い肌と白銀に輝く髪を映えさせていて、彼女の周りだけ冬がきたのかと思ってしまうくらいだった。

「何か、言いたいことでもあるんですか？聞いてあげますよ？」

「あ、ああ、ごめん…。」

「そうだ！せっかくなこうして会えたんだから、」

「お互い、自己紹介をしよう！」

「…自己紹介、ですか？」

そう言っつて、彼女は戸惑ったような表情をした。

「僕、フレッド。よろしく」

「僕、ジョージ。よろしく」

「それで、君の名前は？」

僕はそう言っつて、彼女の顔を覗き込んだ。

「……私が入学するまで秘密、です……」

そう言われましたから……」

彼女は顔を反らしながらそう言った。

「え？」

「やつ、やっぱりどこかのお姫様なんじゃ……」

僕らは顔をひきつらせ、声を揃えた。

「……クスツ」

「え？」

彼女が顔を反らしたまま小刻みに震え始めた。

「……フツ……フフフツ！」

「はっ。」

笑っている？

そう思った僕らの前で、彼女は声を出して笑い始めた。

「フフフツ……アハハハハッ！」

「なっ何で笑ってるの?!」

「え? なっ何がどうなってるの?!」

——これが彼女との出会いだった。

「お二人もまた来たんですか？全く懲りない人達ですね…」

「もちろんさー！」

「二人も？」

毎日のように来るようになった双子。だが、”も”と言われるのは珍しい。フレッドが疑問に思っけてレイラに聞き返そうとしたとき、

「これでいいか？」

「ええ、ありがとうございます」

レイラの後ろから、スリザリン生のマーカス・フロントが現れた。

「ごめん、無かったよ」

「そうそう見つかるものじゃないので大丈夫ですよ」

横の小道からはレイブンクロウのチョウ・チャンが。

「案外簡単に見つかったな」

「そうなんですか？」

空からは、箒に乗ったハツフルパフのセドリック・デイゴリーが。

さらには、

「やっと見つけた、って何でこんなところにいるんだ？フレッドとジョージ」

二人の後ろからグリフィンドールのリー・ジョーダンが。

「」「」「え？」「」「」

お互いの顔を見て、驚く6人。

「皆さん、ありがとうございます！…これで怪我をしたニフラーを助けられます！」

6人の寮関係者知らないレイラは嬉しそうな顔でお礼を言う。

「何でここにいるんだ？」

「こっちのセリフだ、それは」

グリフィンとスリザリンという関係のマーカスとフレッド、ジョージは敵意を剥き出ししている。今にも飛びかかるとする勢いだ。

「お前ら禁じられた森にいて大丈夫なのか？」

「お前もな、デイゴリー」

眉を潜めて言うセドリックにリーが指摘する。その間にも、三人は杖を抜こうとしている。

「喧嘩しないで下さいよ？」

「そうよ、レイラが困ってるわ」

少し困ったような表情をするレイラと、彼女の近くに立って頬を膨らますチョウ。

少女二人が言ったところで事態は何も変わらない。

「「「「めんなさい」」」」」

——普通は。

すぐに謝った5人の男の子を見て、レイラとチョウはフツツと微笑んだ。

「ねえ、今日は何してるんだ？」

「また、魔法見せてよ！」

顔を上げたフレッドとジョージがキラキラした目でレイラに言った。

「今日は動物と話したり、炎を出す練習をしていました。あ、それとニフラーの治療ですね。」

「ラカーナム・インフラマレイ!!」

呪文を唱えると、レイラの杖先からリンドウ色の小さな炎が現れた。

「大きさも変えられるんですよ」

そう言うと、レイラは炎を自分の顔ぐらい大きくしたり、小指の爪ぐらい小さくしたりして見せた。

「わあ、すごいー！」

「君、本当にすごいよ！」

「ありがとうございます」

賞賛してくれる6人にレイラは頬を緩ませた。

随分と長い間、年の近い人と接する機会がなかったためか、彼らといるとなんだか新鮮だった。

賢者の石 編
ダイアゴン横丁

今日は、7月31日。ハリー・ポッターの、11歳の誕生日だ。そして、レイラも約1ヶ月半前に11歳になっている。

ホグワーツへ入学できる年だ。

翌朝

ダイアゴン横丁。魔法使いや魔女が必要とする、ありとあらゆる魔法道具が売られている横丁。

「ここが、ダイアゴン横丁……!」

エリシャと一緒に学用品を買いに来たレイラは、柄にもなく目を輝かせていた。お店に並んでいる品物だけでなく、道行く人々にも興味を示している。

「お嬢様、まずはグリーンゴッツへお金を取りに行きましょう」

そうエリシャに言われるまで、レイラはあっちへ行ったりこっちへ行ったりとフラフラ歩いていた。

「あ、ごめんなさい」

慌ててエリシャの近くへ走るレイラ。

「こんな魔法使いや魔女が居たんですね……。どうしよう、ワクワクしてきました！」

「フフツ、お嬢様もやっぱり11歳ですね」

エリシヤの後を追いながらも、レイラは周りのものに気をとられていた。

「面白そうな本がたくさん……。あつちにはニンバス2000が……。クディツチも……」

目がいくつあつても足りない。家や学校にあつた本や薬品よりもたくさんものがある。

そう思いながらキョロキョロしていると、目の前にそびえる真っ白な建物が見えてきた。

「グリーンゴツツに着きましたよ、お嬢様」

「わあ、本で見たのと一緒ですね……。！」

中は広々とした大理石のホールだった。

「お早うございます」

エリシヤがカウンターにいる小鬼に声をかけた。

「レイラ・ユオハーゼさんの金庫からお金を取りに来ました」

「鍵はお持ちですか？」

……。鍵。え、カギ？そんなものあつたっけ？

「お嬢様、大丈夫です」

慌ててポケットを探り始めたレイラにエリシヤが微笑みかけて、小

小さな黄金の鍵を取り出した。

小鬼は慎重に鍵を調べてから、「承知しました」と言った。

「誰かに金庫へ案内させましょう。グリップフック！」

グリップフックも小鬼だった。て、というかハリーの時と同じ名前の小鬼がやって来た。

二人はグリップフックについて、ホールから外に続く無数の扉の一つに向かった。

「エリシャが鍵を持っているなんて知らなかったですよ」

「お嬢様が11歳になるまではお前が所持している、と前当主様に言われてましたので」

グリップフックが扉を開けてくれた。

そこは松明に照らされた細い石造りの通路だった。急な傾斜が下の方に続き、床に小さな線路がついている。

グリップフックが口笛を吹くと、小さなトロツコがこちらに向かって元気よく線路を上がってきた。

小さな扉の前でトロツコは止まった。

グリップフックが扉を開けると、緑色の煙がモクモクと吹き出してきた。それが消えたとき、レイラはあっと息をのんだ。

中には金貨の山のまた山。高くつまれた銀貨の山々。そして、小さなクヌート銅貨までザツザクだ。

もしかしたらあのハリーポッターよりもたくさんのお金が入っているかもしれない。

「みんなお嬢様のものですよ」

エリシヤは微笑んだ。

全部私の……信じられない。

「お嬢様のお父様、お母様が残されたもの、叔父のレオン様が残された、全財産が入っております。あ、ちなみにユオハーゼ家の金庫は別にありますよ」

嘘だろ……どれだけ金持ちだったんだよ、私の家系は。

「これだけあれば……パフエ何個食べられるかしら？あ、団子でもいいなあ……」

「お嬢様、まずは学用品ですよ」

エリシヤに指摘されたレイラは慌てて頭を振って、バックを取り出した。

「そうでしたね」

エリシヤはレイラがバックにお金を詰め込むのを手伝った。

もう一度猛烈なトロツコを乗りこなした二人は、グリーンゴッツの外に出た。

外は陽の光がサンサンと降り注がれていた。それに顔をしかめていたレイラにエリシヤはある番傘を差し出す。

「ありがとうございます、エリー」

微笑んだレイラは番傘を差しして、ため息をついた。

「私達の家系は厄介ですね……特製のこの番傘を差さないと太陽の下を歩けないなんて……」

「元々闇に生きる家系でしたからね」

エリシヤの返答に、そうでした、とレイラは苦笑する。

「さて、お嬢様。何かから買いに行きましようか」

「うーん………確か、制服、教科書、杖、大鍋、薬瓶、望遠鏡、ものさし………をかうのでしたよね？」

「はい、そうでしたが………もしかして全部覚えてらっしゃるのですか？」

驚いたエリシヤがそう聞くと、はにかみながらレイラは

「うん、一応ですけど……」

と言う。

「流石です、お嬢様」

「ありがとうございます。……それでは、ここから近い制服を買いに

行くことにしますか」

レイラは『マダムマルキンの洋装店——普段着から私服まで』の看板を指差した。

「あ、でも手分けした方が速いですよね……………エリー、私が制服を買う間、秤、羊皮紙と羽ペン、大鍋、望遠鏡を買ってきてくれませんか？」

そう言ったレイラはお金を分けて、片方をエリシヤに渡す。

「分かりました。では、行つて参ります」

バチツ

エリシヤが音と共に姿を消した。

「……………ふう……………」

エリシヤと別れたレイラは深呼吸をした後、マダム・マルキンの店に近づいていった。

店に入ろうとした時、黒髪で眼鏡をかけた男の子とすれ違った。

……………ハリーポッターだ。

店の外を見ると、ハグリットが手にアイスを持って立っている。

いいなあ、アイス、いいなあ。この時期にちょうどいいじゃないか。

「嬢ちゃんもホグワーツなの？」

ボーツとしていると、急に声をかけられた。マダム・マルキンだ。

「あの……」

「全部ここで揃いますよ……もう一人お若い方が丈を合わせているところよ」

スルーってこの世界にもあるんだ……。

妙なことに感心しながら、マダム・マルキンについていくと、プラチナブロンドの髪の子の隣の台に立たせられ、頭から長いローブを着せかけられた。

「やあ、君もホグワーツかい？」

「はい、そうです」

隣の男の子が声をかけてきた。その瞬間、目があう。

………コイツ、ドラコじゃん。

良かった、知り合いがいた。

ドラコがレイラの顔を見て、はっと息をのんだ。

「きつ、君、もしかしてレイ・ユオハーゼの妹？」

「そうですよ。あなたはドラコ・マルフォイさん、ですよね？」

そう言うと、ドラコは嬉しそうにうなずいた。

「………君は？」

「私は、レイラ・ユオハーゼです。これからよろしくお願いしますね、ドラコさん」

「ドラコでいい」

「では、私はレイラで」

にっこり笑って一応軽く会釈する。

「君、本当にレイにそっくりだね……………」

ドラコがレイラの顔を見ながらそう呟く。

「はい、皆が言っています。違うのは瞳の色だけだと」

今のレイラの瞳は深い蒼色をしている。なぜか、当主として働くときののみ、瞳は紅く染まる。

顔が似ているのは……………まあ、同一人物だからね

「そつ、その色も僕はいいと思うよ……………」

「ありがとうございます」

そんな事を言ってくれる人は初めてだ。

レイラが微笑むと、ドラコは頬を赤らめて視線をそらした。

「さあ、終わりましたよ、坊っちゃん、嬢ちゃん」

タイミング良く、マダム・マルキンがそう言った。

レイラはトンツと踏み台から跳び降り、マダム・マルキンにお金を渡す。そして制服を受け取って、ドラコに一礼してから店を出た。

「お嬢様！」

外に出て、番傘を差すと、ちょうど良くエリシヤが帰って来た。

「全て上等なのを買い揃えました！」

「ありがとうございます、エリー。助かりました」

「勿体なきお言葉です！」

さあ、次のものを買いにいこうと足を踏み出した時だった。

「レッ、レイラー！」

後ろでドラコの声が出た。

「また・・・ホグワーツで会おうね！」

顔を赤らめ、そう叫んだドラコにうなずいて、レイラーはてを振った。

杖との出会い

ドラコと別れたレイラとエリシヤは、次に教科書を買った。『フローリシユ・アンド・ブロッツ書店』の棚は、天井まで本がぎっしりと積み上げられていた。

「へえ……こんな本もあるんですね……」

本を熱心に読んでいたレイラは、エリシヤに服を引つ張られるままで、周りの音に気づかなかった。

「ふむ、興味深い本がたくさん……」

「行きますよ、お嬢様」

「あ、待って！」

書店の次は、薬問屋に入った。腐った卵とカビたキャベツの混じった酷い臭いがしたが、そんな事が気にならないほど面白いところだった。

ホグワーツで見たことがあるものが多数だったが、中には一角獣ユニコーンの角など、希少なものがたくさんある。

エリシヤが基本的な材料を注文している間、レイラは、緑色のキラキラした何かの目玉（一さじ 三シツクル）をしげしげと眺めていた。

薬問屋から出て、エリシヤはもう一度レイラのリストを調べた。

「あとは、杖だけです。……では、オリバンダーの店に行きましょう」

う」

魔法の杖……これこそ、レイラがこの世界で一番欲しかったものだ。

最後の買い物物の店は狭くてみすぼらしかった。剥がれかかった金色の文字で、扉に『オリバンダーの店——紀元前三八二年創業

高級杖メーカー』と、書いてある。

中に入るとどこか奥のほうでチリンチリンとベルが鳴った。天井近くまで整然と積み重ねられた何千という細長い箱の山が、埃と静けさそのものが、密かな魔力を秘めているようだった。

「いらっしやいませ」

柔らかな声があった。レイラは気配を感じていたのであまり驚かなかったが、エリシャは飛び上がった。

目の前に老人が立っていた。店の薄明かりで、大きな薄い色の目が、二つの月のように輝いている。

「ようこそ、私がオリバンダーです」

「こんにちは、私はレイラ・ユオハーゼと申します」

「なんと……ご無事でしたか」

オリバンダーは嬉しそうに目を細める。

「えっと……はい……？」

レイラはぎこちなくうなずいた。

「お父さんと同じ目をしていなさる。あの子がここに来て、最初の杖を買っていったのがほんの昨日のことのようじゃ。あの杖は28cmの長さ。トウヒの木でできていて、ドラゴンの心臓の琴線を使って作る。しなりが良く、変身術に最適じゃった」

オリバンダー老人はさらにレイラに近寄った。レイラは老人が瞬きをしてくれたらいいのと思った。

「お母さんの方はナナカマドの杖が気に入られてな。ドラゴンの心臓の琴線で26cmの振りやすい杖じゃった。お兄さんは楓にドラゴンの心臓の琴線、25cm。固くしっかりしておる杖を気に入られた。いや、母上と兄上が気に入られたと言うたが——実は勿論、杖の方が持ち主の魔法使いを選ぶのじゃよ」

オリバンダー老人はニツコリと笑った。

「さて、それではユオハーゼさん。拝見しましょうか」

老人は銀色の目盛りの入った長い巻き尺をポケットから取り出した。

「どちらが杖腕ですかな？」

「えっと、右利きです」

「腕を伸ばして。そうそう」

そういうとオリバンダーは銀色の巻尺でレイラの様々な部分の長さを測りながら杖の説明を始めた。その説明が終わるとともに、レイラに一本の杖を差し出した。

「ユオハーゼさん、これをお試し下さい。クマシデの木にドラゴンの心臓の琴線。23cm、良質でしながらい」

レイラは杖を手にとり取って、ちよつと振ってみた。オリバンダー老人はあつという間にレイラの手からその杖をもぎ取ってしまった。

「ナシの木に一角獣ユニコーンのたてがみ。18cm、振りぐたえがある。」

レイラは試してみた……しかし、振り上げるか上げないうちに、老

人がひったくってしまった。

「だめだ。いかん——次はセコイアの木に不死鳥の羽根。22cm、バネのよう。さあ、どうぞ試してください」

レイラは次々と試してみた。いったいオリバンダー老人は何を期待しているのかさっぱり分からない。試し終わった杖の山が古い椅子の上にだんだん高く積み上げられていく。

「難しい客じやの。え？心配なさるな。必ずピッタリ合うのをお探ししますでな……さて、次はどうするかな……おお、そうじゃ……珍しい組み合わせじやが、クルミの木と不死鳥の羽根、27cm、良質でしなりが良く、美しい」

レイラが杖を手に取ると、急に指先が温かくなった。杖を頭の上まで振り上げ、店内の空気を切るようにヒュツと振り下ろす。すると、銀色の光が蒼と紅色の火花と交わりながら流れ出し、壁に反射した。「ブラボー！」

オリバンダー老人が手を叩き、そう叫んだ。

「素晴らしい。いや、よかった。この杖は今まで誰も選ばなかったのじやが、今回あなたが選ばれた訳じやな」

杖の代金に7ガリオンを支払い、オリバンダー老人のお辞儀に送られてレイラとエリシヤは店を出た。

9と3 / 4番線の旅

9月1日

「お嬢様、お忘れものではありませんか？一人で学校へ行くのは大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ、エリー。そんなに心配しなくても、向こうには知り合いがたくさんいますから」

列車の最後尾の車両近くのコンパートメントで、レイラは今日何回目かのやり取りを、窓から見えるエリシヤとしていた。

「でっですが……」

「何かあったらルナに伝言託しますし、向こうにはダンプルドア先生もいらつしやるのですよ？ヴォルデモートごときに負けるような人ではないです」

だから、安心して。とレイラは微笑んだ。

「分かりました。……では、お嬢様。私は仕事に戻りますので。道中、お気をつけて」

「ええ、エリーもね」

お互い視線を交わらせる。

バチッ

姿くらましをしたエリシヤがその場から一瞬で消えた。

「……………」

エリシヤが消えたその場所をじっと見つめているレイラ。少し不安なのだろうか、その瞳は揺れている。

と、その時

「きゃああああ!!」

レイラに近い、列車の戸口の階段から女の子が滑り落ちた。その上に、その子の荷物らしいトランクが迫っている。

「——つウインガーデ diam 　　レヴィオーサ!!」

咄嗟に窓から飛び出したレイラは、浮遊呪文を唱えてトランクを浮かした。そして、杖を持っていない方の手で女の子を抱き止める。

「……………ふう、大丈夫ですか？」

ゆっくりトランクを降ろしながら、レイラは女の子に問う。

その女の子はレイラをぽーっと見つめた後、顔を赤くしながら、

「だっ、だっ、大丈夫です！ありがとうございます！」
と言った。

「そう、それならよかったです」

レイラは微笑んで、女の子を地面に降ろした。そして女の子に軽く会釈して、自分のコンパートメントに向かって歩いた。

その後ろ姿に熱い視線が送られているとも知らずに。

レイラが助けたこの女の子は、パンジー・パーキンソン。後のスリザリンの女の子だ。

ちなみに、今のレイラの服装はローブを着る前の男の子の服装。髪を後ろの高い位置でポニーテールにしているとはいえ、男の子と見間違えるのも無理はない。

この列車に乗車してから、20分が経った。

ぼーっと窓の外を眺めているうちに、発車まであと10分となっていた。

コパートメントに誰か来る前に、さっさとローブへの着替えを済ませる。着替え終わったレイラは、トランクのポケットから数少ない本の一冊を出した。

家ごと本が燃えてしまったため、今手元にあるのは自分で買った本のみだ。

(さて、続きはどこからでしたっけ?)

レイラは本のページをパラパラとめくる。と、そこへ

「あの……ここ空いてるかな?もう一人いるんだけど……」

と、黒髪に緑色の瞳をした男の子がコンパートメントの扉を開けて、声をかけてきた。

「他のどこもいっぱいなんだ」

(……原作と違う……)

彼の言葉に、レイラは一瞬少し戸惑いを見せたが、すぐに笑顔で返事をした。

「ええ、勿論」

「よかった、ありがとう」

レイラの返事にホッとしたような顔をした黒髪の子に続いて、赤髪

の男の子も入ってきた。

「ねえ、せっかくだから、自己紹介しないかい？」

荷物を整理し終えた赤髪の子が唐突にそう言う。

「僕はロナウド・ウィーズリー。ロンって呼んで」

赤髪の男の子がそう言うと、続いて黒髪の男の子が名乗った。

「えっと、僕はハリー・ポッター。ハリーでいいよ」

「えっ！君、本物？じゃあ、あれはあるの？その……ここにある、あれ」

ロンが右の額を指差し、驚いた様子でそう言った。ハリーが前髪を手で上げる。

そこには稲妻型の傷が、確かにあった。

「本当だあ……」

「ねえ、君の名前は？」

感動しているロンに変わり、ハリーがレイラに聞いてきた。

「私はレイラ・ユオハーゼと言います。レイラでいいですよ。二人とも、よろしくお願いします」

レイラが会釈してそう言うと、ロンは目を見開いて驚いたような顔をした。

「きつ、君今レイラ・ユオハーゼって言った？だ、だって例のあの人に殺されたって……」

「……そうなんですか？」

お互い驚いたような顔をしてキョトンとする。

「まあ、私はその事について覚えていませんし、無かったことに……」

そこまで言ってレイラは思い出した。両親と兄が死んだ瞬間を。緑の閃光で埋め尽くされた家を。

「あー……その件については先生方に聞いてみますね」
「うっ、うん」

しばらくしてロンがスキヤバーズを見せてきた。ペティグリューだ。この野郎、呑気に寝やがって……

「寝てばっかりだ。死んでたって、きつと見分けがつかないよ。昨日、少しは面白くしてやろうと思って黄色に変えようとしたんだ。けど呪文が効かなかった。やってみせようか——」

そういつてロンはトランクをゴソゴソと引っ掻き回し、くだびれたような杖をとり出した。ボロボロで、端からなにやら白い物が出ている。

「^直ロン、それ壊れているんじゃないですか？ちよつと貸してください。
レ。パ。ロ」

レイラは杖を取り出して呪文を唱えるを。ロンの杖から火花が散り、新品同然になった。ハリーは目を丸くしている。

「うわー、すごいね！ありがとう！」

喜ぶロンに気にしないで、と応じ、ロンがスキヤバーズに杖を振り上げたとき、コンパートメントの扉が開いた。

「誰かヒキガエルを見なかった？ネビルのがいなくなったの」

扉を開けたのは、なんとなく威張ったような話し方をする女の子だった。その後には丸顔の男の子が泣きべそをかいている。

「見てないよ」

ハリーとロンの声が重なる。

だが女の子は聞いてもいないような様子で、

「あら、魔法をかけるの？それじゃ、みせてもらうわ。」

と座り込み、ロンは少したじろいだだが、すぐに呪文を唱えた。

『お陽さま、雛菊、とろけたバター。デブで間抜けなねずみを黄色に変えよ』

だが何も起こらない。スキヤバーズは相変わらずねずみ色だ。

「その呪文、間違っていないの？まあ、あんまりうまくいかなかったわね。私も練習の……（そういえば、ハーマイオニーって最初はこんな感じだったよな……）私はハーマイオニー・グレンジャー。あなた方は？」

ハリーとロンは教科書を暗記したという彼女の発言に啞然としていた。

「ぼ、僕、ロン・ウィーズリー」

「ハリー・ポッター」

「ほんとに？私、もちろんあなたのこと知ってるわ」

そしてハーマイオニーはいかに自分がハリーを知っているかという事について語り始めた。もはやハリーは呆然としているし、レイラも半分呆れていた。ハーマイオニーの記憶力がすごすぎる。

レイラは話が終わるのをみはからって、「レイラ・ユオハーゼです」と自己紹介した。

「え？レイラ・ユオハーゼって家族と一緒に殺されたって『20世紀の魔法大事件』に出てた……いや、ごめんなさい。レイラね。よろしく」
「気にしないでください、一般的には殺されたことになっている？みたいですから」

「そう……とにかく、もういくわ。ネビルのヒキガエルを探さなきゃ」
そしてハーマイオニーが出て行こうとしたとき、レイラは呼び止めた。

「すみません。ネビルですよね？ヒキガエルの名前は？」

「トレバーだよ」

そう言ったネビルはもう泣き出しそうだ。

「そう、ちょっと待っててくださいね……[＊]アクション・^いトレバー」

『呼び寄せ呪文』を使ったレイラをハーマイオニーは怪訝そうに見る。

「呪文、それであってるの？」

そういった次の瞬間、一匹のヒキガエルが飛んできた。ハーマイオニーは目を丸くしている。

「トレバー！」

ネビルは大喜びだ。

「すごいわね、あなた。そんな呪文、教科書にのってたかしら」

「1年生のものにはのっていないはずですよ。これは4年生で習うものですから」

というと、ハーマイオニーは口をあんぐりとあけた。

「ありがとう、僕、ネビル・ロングボトム。助かったよ」

「レイラ・ユオハーゼです。これからよろしくお願いしますね、ネビル」

ハーマイオニーとネビルはそのまま自分たちのコンパートメントに戻った。

「車内販売はいかがが？」

お昼時になると、車内販売のおばさんが、カートを引いてやって来た。

ロンはお弁当を持って来ていたため、何も買わなかったが、ハリーとレイラは、爆買というものをしていた。レイラが買ったのは主に甘いものを中心としたお菓子だ。

それぞれ昼食をとっていると、コパートメントの扉が勢い良く開いた。同時に誰にも気づかないように、レイラがトランクを開けてそこに吸い込まれる。

「ここに、ロニー坊やはいるか？」

「それと、銀髪碧眼の美少女」

「あと、ハリー・ポッターと、」

「銀髪碧眼の美少女」

入って来たのは赤毛の双子だった。ハリーが『銀髪碧眼の美少女』の言葉に先程までレイラが居た場所を見つめた。だが、いない。

その間に、ロンと双子が話していた。

「僕は、坊やじゃない！それで、兄さん達何かよう？」

「かわいいーかわいいー弟の入学なんだぜ？」

「どんな感じか偵察に来たってわけさア」

ジョージ、フレッドの順にそう言った。

「ああ、それなら心配ないよ。だって、あのハリー・ポッターと友達になれたもん」

「なんだって?!」

「そんなバカな!?!」

ロンの得意げな表情に、彼らはわざとらしく頭を抱えた。

「他に何かあるかい?」

ロンが聞くと、

「ああ、もうないぜ」

「そんじや、僕たちはこれで」

そう言って先程と同じようにして出ていった。

「ねえ、ハリー彼女はどこに行ったの?」

「彼女とは私のことですか? ロン」

そこには、『銀髪碧眼の美少女』がいた。

―数分後―

ガラガラ――

「ほんとかい？このコンパートメントにハリー・ポッターがいるって、汽車の中じゃその話でもちきりなだけ。それじゃあ、君なのか？」

入って来たのは青白い、気取った少年だった。後ろに弱そうなボディーガードが二人いる。ああ、ドラコとクラブとゴイルだ。どつちがどつちか知らんけど。

私なら指一本で倒せるなあ……

レイラがそんな物騒なことを考えている途中にも話は進んでいた。

「間違ったのかどうかを見分けるのは自分でもできると思うよ。どうもご親切様」

ハリーが冷たく言った。

ドラコは真っ赤にはならなかったが、青白い頬にピンク色がさした。まだ、レイラの気づいていない。

「ポッター君。僕ならもう少し気を付けるがね」

からみつくような言い方だ。

「もう少し礼儀を心得ないと、君の両親と同じ道をたどることになるぞ。君の両親も……（飽きてきたレイラは百味ビーンズを開けて中を覗いた）ウィーズリー家やハグリッドみたいな下等な連中と一緒にいると、君も同類になるよ」

ハリーとロンが立ち上がった。ロンの顔は髪の毛と同じぐらい赤くなった。

(わお、面白そうになってきた)

少しワクワクしながらこの成り行きを見守るレイラ。

「もう一ぺん言ってみろ」

ロンが叫んだ。

「へえ、僕たちとやるつもりかい？」

ドラコはせせら笑った。

「いますぐ出ていかないならね」

ハリーはキツパリ言った。

クラブもゴイルもハリーやロンよりもずっと大きいけれど、グリフィンドールに入るだけあってハリーとロンは勇敢だなあ。

レイラは他人事のようにそう思いながら百味ビーンズを口に放り込んだ。

(ふむ、トースト味といちごですか。当たりですね)

「出ていく気分じゃないな。君たちもそうだろう？僕たち、自分の食べ物全部食べちゃったし、ここにはまだあるようだし」

ドラコがニヤニヤと笑いながらそう言った。そして、ゴイルが蛙チョコレートに手を伸ばす。……その蛙チョコレートはレイラの近くに置いてある物だ。

ゾワアッ

ハリーは急に背筋が凍るような寒気に襲われた。ロンやドラコ、クラブも顔を青くしている。その禍々しいものを直接当てられているゴイルはガタガタと震えていた。

「あのお」

その殺気のようなものを出している張本人が口を開いた。

「それ、私の何ですけど。て、というか人の勝手に食べるなら金払って下さい。定価の3倍くらいで」

ニツコリと笑顔のまま、そう言ったのはレイラだ。その笑みには凄惨な色加わっている。

その声に過剰反応したドラコは、背筋をピンと伸ばした。

「レッレイラ・ユオハーゼ殿……!」

「何ですか?」

「あ、いえ、お元気でしたか?」

「ええ」

「では、僕はこの辺で。同じ寮になれる事を祈っています」

そこまで言うと、ドラコはクラブと気絶しかけているゴイルを連れて慌ててコンパートメントから出ていった。

レイラ以外の二人は、口を閉ざし、キョロキョロと辺りを見渡していた。

少しして沈黙に耐え兼ねたのか、ハリーが口を開いた。

「レイラは彼と仲がいいの?」

率直な感想だ。

「いいえ。色々とありまして……私の兄があちら側で、そこで知り合っただんです」

また沈黙が始まった。

レイラは何事もなかった様に、読書を始めた。

——だが、その沈黙はまたすぐに破られる。

ガラガラ——

「レイラッ!!」

「やっと見つけた!!」

バフツ——

「……え?」

ハリー、ロン、二人の声がシンクロした。

驚くのも無理はない。なんと、先程来たロンの兄達が、レイラに飛びついたのである。

「なんで隠れていたのさ!」

「僕らの事嫌いになったの?」

「……いえ、違いますが、重いです。死んじやいます……」

苦しそうにジタバタするレイラに、悪い悪い、とロンの兄達は笑いながら退いた。

「…兄さん達、いつの間になんか綺麗な人を…」

「も、もしかして、先輩?!」

ハリーとロンは問いかけた。返って来た答えは…

「フツ、どうだ！」

「羨ましいか？ロニー坊や」

これにはあぜんとしてしまった。どうやら彼らと彼女は…

と、ここまで想像を膨らませてしまった二人。

すると、バンツという音とともに、双子が頭を抑えた。

「イタっ！」

「嘘をつくんじゃない！このグリフィンドール！」

突如、コンパートメントの扉からスリザリンの先輩、マーカス・フリントが現れた。その手には大量の本が。

「レイラはスリザリンの新しいシーカーとなって俺達スリザリンの栄光を……」

「まだ、スリザリンに入るとは決まっていなくていいでしょう。レイラは私と一緒にレイブンクローを一位に導くのです」

マーカスの後ろからレイブンクローのチョウ・チャンが頬を膨らましながらたくさんの本を手に見せた。

「違う！グリフィンドールだ！」

フレッドとジョージが頭を抑えながら威嚇する。

「何処でもいいでしょう。それよりも、その手にしている大量の本は何ですか？」

前振りも無しに現れた四人の先輩に呆れながら、レイラはそう言

う。

「ああ、これはレイラが本を読むのが好きらしいから家にあつたものを持ってきたんだ」

「遠慮せずには非受け取って下さい」

マーカスとチョウウから大量の本を受け取ったレイラ。

「本当にいいんですか……！ありがとうございますー！」

目をキラキラさせながら、お礼を言ったレイラを見て、フレッドとジョージは、

「じゃあ、僕らからはイタズラセット!!」

と、言ってポケットから大量のイタズラ道具を取り出した。

「ホグワーツってこういうのダメだったんじゃない……」

「まあまあ、レイラも共犯ってことで」

「そうだよー！」

ええー？と、言いながらも嬉しそうに受け取ったレイラ。

「え……やっぱり、先輩なんじゃ……」

完全に置いてけぼりを食らっていたハリーとロンがポカンとしながらこちらを見つめている。

「二人とも、勘違いしないでくださいよ？私は新入生です」

「そ、そうなんだ」

「びっくりしたよ……」

二人が胸をなでおろした。

車内放送の声で通路に溢れる人の群れに加わったレイラはハリーとロンとはぐれないようにしながらゆっくりに歩いた。

暗いプラットホームに下りると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「イツチ年生はこっち！イツチ年生はこっちだ！ようハリー、元気か？」

ハグリッドのひげもじやの顔がにこりとハリーに笑いかけた。

「さあイツチ年生、ついて来い！足元に気をつけろ！」

滑ったり、つまずいたりしながら険しい山道を降りていく。右も左も真っ暗だった。

「さあみんな、ホグワーツが見えるぞ。この角を曲がったらだ。」

ふりかえってハグリッドが言う。

「うお——っ！」

歓声が上がった。

狭い道がいきなり開け、大きな黒い湖のほとりにでた。向こう岸には高い山がそびえ、てっぺんには壮大な城が見えた。ホグワーツだ。胸が高鳴った。

その後、4人ずつボートに乗せられた。ハリーにロンにレイラ、ハーマイオニーが乗り込んだ。そのボート船団は鳶のカーテンをくぐり、陰に隠れてぽっかりとあいている崖の入り口へ進んだ。城の真下と思しきトンネルの先には地下の船着場があつた。全員が上陸した。

私たちは石段をのぼり、巨大な樫の木の扉の前に到着した。

「みんな、いるな?」

ハグリッドは確認し、城の扉を握りこぶしで3度たたいた。

組分け儀式

扉が開き、エメラルド色のローブをきた背の高い黒髪の厳格そうな顔つきをした魔女が現れた。マクゴナガル先生だ。

「マクゴナガル先生、イツチ年生の皆さんです。」

「ごくろうさま、ハグリッド。ここからは私が預かりましょう。」

そういつて、扉を大きく開けたマクゴナガルに続いて生徒たちは石畳のホールを横切っていった。そのホールはたいまつで照らされていて、天井は高くて見えないほどだ。レイラ達はは学校中のざわめきが聞こえる食堂・・・ではなく、そのわきにある小さい空き部屋に案内された。

「ホグワーツ入学おめでとう。」

そういつて始まった挨拶の中でも、組み分けの方法について語られることはなかった。身だしなみを整えておくようにと言い残してマクゴナガルは出て行った。みんな不安そうな顔で組み分けの方法について話し合っている。ハーマイオニーは呪文を早口で繰り返し、ロンは試験のような物だろうとハリーに言っていた。意見を求められたレイラは、明るく言った。

「もし、試験をする場合は全校生徒がいる前ではしらないと思いますよ。緊張しちやいますし、何よりまだ何の魔法も知らない人が多いでしょう？そんな恥さらしになるようなことをダンブルドア先生は絶対にしなないと思います」

レイラの言葉に明らかに周囲から安堵の雰囲気伝わってくる。みんなそんなに不安だったのか、じゃあ勉強しておいでよ。

その時、生徒たちが悲鳴をあげた。何事かと見てみると、20人くらいのゴーストが壁から現れるところだった。

「もう許して忘れなされ。彼にもう一度だけチャンスをあげましょうぞ」

そういったのは、太った小柄の修道士だ。

「修道士さん。ピーブズにはあいつにとって充分すぎるくらいのチャンスをやったじゃないか。我々の面汚しですよ。しかもあいつは本物のゴーストじゃない・・・おや、君たち。ここで何をしているんだい?」

ひだのある襟付きの服とタイツをはいたゴーストが問いかけるが、誰も答えない。

「新入生じゃな。これから組み分けされるところか。ハツフルパフで会えると良いな。私はその卒業生じゃからの」

とは、太った修道士だ。

「さあ、行きますよ」

厳しい声でした。

「まもなく組分け儀式が始まります」

マクゴナガルに呼ばれ、大広間につれられていった。

そこには、すばらしい光景が広がっていた。何千ものろうそくが空中にうかび、上級生たちが座る4つの巨大な長テーブルと先生方の座る上座のテーブルを照らしていた。天井は黒い空に星が瞬いていた。

「本当の空に見えるように魔法がかけられているのよ。『ホグワーツ

の歴史』にかかれていたわ」

ハーマイオニーの声が聞こえる。流石ハーマイオニー。ちゃんと本読んでんだね。

マクゴナガルが一年生の前にスツールと古ぼけた帽子をおいた。組み分け帽子だ。レイラが感激してみると、帽子はいきなり歌いだした。

『わたしはきれいじゃないけれど

人は見かけによらぬ物

私をしのぐ賢い帽子

あるなら私は身を引こう

山高帽子は真つ黒だ

シルクハットはすらりと高い

私はホグワーツ組み分け帽子

私は彼らの上をいく

君の頭に隠れた物を

組み分け帽子はお見通し

かぶれば君に教えよう

君が行くべき寮の名を

グリフィンホールに行くならば

勇気ある者が住まう寮

勇猛果敢な騎士道で

他とは違うグリフィンホール

ハツフルパフに行くならば

君は正しく忠実で

忍耐強く真実で

苦労を苦労と思わない

古き賢きレイブクロー

君に意欲があるならば

機知と学びの友人を

ここで必ず得るだろう

スリザリンではもしかして

君はまことの友を得る

どんな手段を使っても

目標遂げる狡猾さ

かぶってごらん！恐れずに！

興奮せずに、お任せを！

君を私の手に委ね（私は手なんかないけれど）

だって私は考える帽子！』

広間の全員が拍手喝采をした。原作の時と同じだったが目の前で聞くと、とても迫力があつた。

「ABC順に名前を呼ばれたら、帽子をかぶって椅子にすわり、組み分けを受けてください。」

「アボット・ハンナ！」

金髪のおさげの女の子が転がり出てきた。帽子をかぶると目が隠れた。

『ハツフルパフ！』

帽子が叫んだ。

次のボーンズ・スーザンとハップルパフになった。そして次々と寮が決まっていく。

「グレンジャー・ハーマイオニー！」

ハーマイオニーは走るようにして椅子に座り、待ちきれないといった面持ちで帽子をかぶった。

『グリフィンドール！』

ロンがうめくのが聞こえた。ハーマイオニーはこっちをみて笑いかけてきた。レイラも笑顔を返して拍手した。

ネビルはグリフィンドールに、マルフォイはスリザリンに入った。原作どおりでよかった。次はハリーの番だ。

「ポッター・ハリー！」

広間中が静まり返り、好奇や尊敬、畏怖、侮蔑といった様々な視線がハリーを包む。ややもして、帽子が叫んだ。

『グリフィンドール！』

グリフィンドールのテーブルに向かうハリーは大歓声で迎えられた。よかつたな、ハリー。

組分けが最後の方になっていく。

「ユオハーゼ・レイラ！」

遂にレイラの名前が呼ばれた。

広間は一瞬水を打ったように静かになり、やがてざわめきが広がっていく。唾然としている人も多い。ちらりと教職員テーブルを見ると皆苦笑している。本当に死んだと思われ、そう公表されていたのだろう。そんな事全然知らなかったが。

レイラは帽子をかぶった。帽子の内側の闇が見える。『閉心術』を使い、転生の記憶だけを隠す。

(ふーむ。)

低い声が耳元で聞こえた。

(君には並々ならぬ勇気がある。優しさにも、才能にも溢れている。しかも、目標のためには手段をえらばぬ狡猾さも持っている。しかし、家系上ではスリザリンだな。さて、どこに入れたものか・・・)
(スリザリンはダメです)

(確かかね？君がスリザリンに入れば偉大になれる可能性があるんだよ。嫌かね？それならば、むしろ・・・)

『グリフィンドール！』

帽子が広間全体に向けてそう叫んだ。その瞬間、最高の割れるような歓声に迎えられた。グリフィンドール以外からは呻くような声が聞こえた。誰だよそんな声だしてんの。

「レイラ！よかったよ！」

フレッドとジョージが歓声を上げ、そう言った。

最後の一人が組み分けられ、マクゴナガルが教職員のテーブルにもどる。ダンブルドアが立ち上がった。

「おめでとう！新入生の諸君、おめでとう！歓迎会を始める前に一言二言言わせていただきたい。．．．おっと、その前に、皆に説明せねばならんかのう。」

そう言うときダンブルドアはレイラのほうをちらりと見た。

「Ms. ユオハーゼはヴォルデモートに殺されたと言われておった。実際そのように、わしも語った。なぜなら、彼女の生存は理由があつて隠さねばならなかったのじゃ。当時は闇の魔法使いたちもまだまだ沢山おり、命を狙われる可能性があつたからのう。このことは明日の『日刊預言者新聞』に詳しく載るであらう。」

そうなんだ．．．

レイラは分かつたような分らないような感じがした。
ダンブルドアはいたずらっぽく笑う。

「さて、こんな老いぼれの話聞いても腹はふくれんじやろうからそろそろおわりにしよう。そーれ！わっしょい！こらしょい！どっこらしょい！以上！」

出席者全員が拍手喝采した。

テーブルに視線を戻すと、大皿が食べ物でいっぱいになっていた。ローストビーフ、ローストチキン、ポークチョップ、ラムチョップ、ソーセージ、ベーコン、ステーキ、ゆでたポテト、グリルポテト、フ

レンチフライ、ヨークシャーピング、豆、にんじん、グレービー、ケチャップ、ハツカ入りキャンディ。

アイスクリーム、ドーナツ、ゼリー、パフエ。

料理はどれもこれもおいしかった。食べている最中に「ほとんど首なしニック」が挨拶したり、家族の話題になったりした。レイラのことは、ダンブルドアがざつくりとでも説明してくれたおかげで、その手の質問責めにされずに済んだのは、ありがたかった。皆が食べ終わった頃、再びダンブルドアが立ち上がった。

「エヘン——全員よく食べ、飲んだことじやろうからまた二言、三言。新学期をむかえるにあたって、いくつかお知らせがある。1年生に注意しておくが、校内にある禁じられた森には入ってはいけません。これは上級生にも、何人かの生徒に特に注意しておきます。」

ダンブルドアは双子のウィーズリーとレイラを見た。双子は目をそらす。レイラは目を閉じて何も見えないふりをした。

「管理人のフィルチさんから、授業の合間に廊下で魔法を使わないようにという注意がありました。」

「今学期は2週目にクイディッチの予選があります。寮のチームに参加したい人はマダム・フーチに連絡してください。」

おお、クイディッチか、やって見たいな。

「最後ですが、とても痛い死に方をしたくない人は、今年一杯は4階の右側の廊下に入ってはいけません。」

・・・賢者の石か。

「では、寝る前に校歌を歌いましょう！」

各自が好きなメロディーで歌った。飛び切り遅い葬送行進曲で歌っていた双子のウィーズリーにあわせてダンブルドアが指揮を杖でしていた。

「ああ、音楽とは何にも勝る魔法じゃ。さあ諸君、就寝時間。駆け足！」

グリフィンドールの1年生はパーシーの後に続いてグリフィンドール塔へ向かった。途中、ピーブズが襲撃してきたが、パーシーが追い払った。そしてようやく「太ったレディ」の肖像画に到着した。みんな談話室では止まらず、そのままめいめいの部屋へむかった。

レイラはハーマイオニー、ラベンダー・ブラウン、パーバティ・パチルとの4人部屋だった。挨拶もそこそこに、4人はベッドにもぐりこんだ。よほど疲れていたのか、レイラはあっという間に寝てしまった。明日から、新しい授業がはじまる。

禁じられた森の動物達

翌日。目が覚めると、まだ外は暗く、時計を見るとまだ4時だった。レイラはトンツと音を立てずにベッドからおりた。

「皆さん、お久しぶりですね。元気にしていましたか？」

禁じられた森に着くと、早速集まってきた動物たちにレイラは声をかけた。

「ニフラーは子供が？すっかりパパになりましたね。

ボウトラックル新しい木を見つけたんですね？

デミガイズはイタズラが上手になりましたね」

レイラは久しぶりということもあって、まず近況報告をした。他にも、ケンタウルスの新しい群れに出会ったり、年老いたセストラルが亡くなっていたり、ケルピーが水魔と喧嘩をしていたり、オーグリーが梅雨の日に泣き叫びまくったり……

「え？あつちにとても綺麗な場所がある？是非行きましょう！」

はたから見れば、ヒステリックな女の子だろうが、彼女は開心術を使って動物たちの思考を読み、会話しているので、ヒステリックでは

ない。

「わあ、本当に綺麗ですね……!」

動物達に連れられてやって来たこの場所は花畑の真ん中に小さな泉が湧いており、木漏れ日に程よく反射しているとても綺麗な場所だった。

まるで桃源郷のようだ。

レイラはそう思いながらそつと泉に近づいた。透明な水が光に反射してキラキラ光っている。

ふと横を見ると、一角獣ユニコーンの子供が木の近くに立っていた。

(一角獣!)

じつと見つめあっていると、向こうから近づいてきて、レイラの側に座った。恐る恐る手を伸ばすと逃げもせずレイラに撫でられる。「……………人懐っこいですね」

さらさらとした綺麗な銀色のたてがみが、美しく輝いている。そのうち他の動物達もやって来て、思い思いに寝転んだり、遊んだりし始めた。

そんな和やかな一時が過ぎていたとき、
ピクツ

何匹かの動物が何かの気配を察知した。遠くで遊んでいた動物達も怯えるようにレイラの近くにやってくる。その気配はレイラも感じていた。

(目くらまし呪文をかけ、さらに箒も使わずに空を飛ぶことができる人と言えば……………)

はあ、とため息をついたレイラは、空を見上げて挨拶をした。

「ダンブルドア先生、おはようございます」

「…ほお、わしの気配を察するとは…」

そう言いながら、ダンブルドアが呪文を解いた。

「私の警戒網は最大で500m圏内ですので」

ダンブルドアがゆっくり地面に降りてくる。レイラは動物達が彼を威嚇するのをたしなめた。

「ここは静かでいいのお」

「……………はい」

退学かなあ……………。せつかくの憧れの Hogwarts に来て1日で退学かあ。

少し遠い目をして返事をしたレイラを見て、ダンブルドアは笑った。

「安心せい、流石に退学にはせんぞ。わしも時々来とるしの」

閉心術を使っているのに、ダンブルドアはレイラの考えを読んだ。

「ダンブルドア先生も……………」

ダンブルドアは近くにいたニフラーに手を近づけたが、するりと逃げられた。

「まだまだ触らしてはくれんがのお」

そう言って、ダンブルドアはまた微笑んだ。

「レイラはこの森が、動物達が好きなのか？」

レイラを護るように立っている動物達や、彼女の肩に乗っている動物を見てダンブルドアが言った。

「……………分かりません。でも、自由に生き生きとしているこの生き方に引かれたのかもしれない。……………それに私、人間よりは動物の方が好きなんです。私、優しい人間が苦手なんです」

「なぜじゃ？」

ゆつくりと一角獣ユニコーンの子供やデミガイズを撫でながら、レイラは続けた。

「優しい人間は、傷ついた私を見て傷つくから。動物は心配はしても傷つきはしないから、動物がいいんです」

レイラの頭に乗ったポウトラックルが彼女の銀髪の髪で遊んでいる。

「……………ですが、もうそろそろ帰った方がいいですよね、6時近いですから」

そう言っってレイラは動物達を体からおろして立ち上がった。

「では、ダンブルドア先生」

「また学校でのお」

微笑んだダンブルドアが空に浮かび上がって消えた。

「では、また会いに来ますよ」

名残惜しそうにこちらを潤んだ目で見てくる動物達に、後ろ髪を引かれながらレイラは禁じられた森を後にした。

変身術と魔法薬の授業

大広間に行くと、もう朝食が始まっていた。ハリーとロンがいたので、その隣に座る。

「おはようございます、2人とも。」

「おはよう、レイラ」

美味しそうに並んだ朝食を食べ始めたところでいつせいにふくろう便が届いた。今日の朝刊を受け取り、代金を渡す。

「日刊預言者新聞」の1面には、案の定というべきか、レイラのことが出ていた。

く生き延びた女の子 レイラ・ユオハーゼく

10年前、『名前をいってはいけない例のあの人』が消えた時のことは魔法界では周知の事実であるが、今回その逸話に一石を投じる、衝撃の事実が明らかになった。『生き残った男の子』であるハリー・ポッターだけでなく、純血名家の一つ、ユオハーゼ家のレイラ嬢が生きていたのである。先日、彼女の生存がホグワーツ魔法魔術学校の校長アルバス・ダンブルドアによって公表された。

(2面7行目に続く)

いつの間に撮ったのか、顔写真つきである。レイラはため息をついた。

「私のような子供が一人生きていたとしても、こんなにでかかどのせる必要はないでしょうに」

「いいや、君は自分の有名さをわかっていないよ。魔法界でレイラ・ユ

オハーゼといえはハリーと同じくらい有名なんだよ?」

レイラは呆然とした。そんな風に自分が語られていたとは、想像の埒外だった。

「嘘でしょう?」

「いえ、本当よ」

ハーマイオニーが来た。その後ロンとまた険悪ムードになりそうだったので、レイラは間に入った。

「さあ、急いで食べて準備をしましょう。最初の授業から遅れるわけにはいきませんよ」

そのあと、支度を済ませ教室へ向かう途中。ピーブズに『お使いいたしますので、ご勘弁を』と命乞いをされたり（悪戯をされたので双子のイタズラセットで仕返しをしたらなぜかこうなった）、ミセス・ノリスに懐かれたり（『フィルチさんの猫ですか?いつも世話になってます』と言ったらそうなった）、赤毛の双子に抱きつかれたり（まわし蹴りをしたら吹っ飛んでいった）

遅れないように、と言ったのはレイラなのに、最初の授業から遅れてしまった。ハリーとレイラは教室を探すだけで手一杯なのに、つま先立ちで二人を見ようとしたり、廊下ですれ違った後、わざわざ逆戻りしてジロジロ見てきたりする人がたくさんいて、二人にとっては大迷惑だった。

しかも銀色の髪をしているレイラは、遠くでいてもすぐ分かるためたくさんの人が見物に来ていた。それに加え、もともと複雑な構造のこのホグワーツ城には142もの階段があった。しかもその階段の中には曜日によって違うところにつながったり、真ん中で毎回一段消

えてしまう階段なんかもあったりして、迷宮のようになっていた。

1年生が遅刻するのは当たり前のことらしく、先生方も何も言わなかった。

だが、水曜日の変身術の教室にハーマイオニーと向かう途中、ピーブズに引つ掛けられ、出口のない部屋に閉じ込められてしまった。ピーブズはこちらにレイラがいたことに何故か気づいていなかった。(後で仕返ししよう)

そう思いながら出口を探して歩いていると、驚いたことにそこにはもうハリーとロンがいて、途方にくれていた。

「ハリーとロンじゃないですか。こんなところで何をしているんですか?」

「多分君らと一緒に。ピーブズにやられたんだ」

とハリー。

「ああ、マクゴナガルの最初の授業にでれないよ。どうしたらいいんだ。あの先生、自分の寮にも厳しいって噂だぜ?」

とロンがうめいた。ロンですらマクゴナガルの授業には絶対遅れられないと思っていたというのに、ハーマイオニーは大丈夫だろうかと振り返ると、半分どころか、ほとんど魂の抜けたような面持ちで立ち尽くしていた。

「仕方ありません。では、出口を作りましょう」

「でも、どうやって?授業まで時間が少ないよ?」

ハリーも少し焦ったような面持ちだ。

「魔法を使ってもいいんですが、少し時間がかかりそうなので……」

そう言いながら、レイラは周りを素早く見渡した。

「あ、ここですね」

探していた場所を見つけ、そこに近づくとレイラを訝しそうに見ながらついてくるあとの三人。

「ここはこの部屋で一番魔力が弱い場所です」

「そんなの分かるの!？」

壁をコンコンと叩くレイラを驚いたような顔で見つめるロン。

「昔、教えてもらったので」

右腕のローブを肩まで上げ、レイラは三人に下がるように伝えた。

「今からこの壁を壊します」

「えっ?!ちよ、それは止めた方がいいって!」

「てか、出来るの!？」

「ここは魔法で固められているのよ!?!それにそんな華奢な腕でそんなこと……」

とんでもない発言をしたレイラに三人は首を思いつきり横に振った。それを見たレイラが少し残念そうな顔をしながら、

「では、マクゴナガル先生の授業遅れていいんですか?」

と言うと、

「それは嫌だ」

と、三人は声を揃えてそう返した。

「では、壊します。一応目は瞑っておいて下さい」

三人が目を瞑るのを確認したレイラは右手で拳をつくり、左手で杖を出して構えた。

「ファイニート」

呪文を唱えた瞬間、レイラは壁に拳を叩きつけた。

ドガアアッ

凄まじい音と共に、壁に穴が開いた。そこから抜け出したレイラは、後の三人が呆然としながら穴から出てくるのを見て首をかしげた。

「そんなに驚くことですか？」

レ。直。パ。ロ。

「だっ、だって僕達と同じ年の君が……………」

「こんなこと出来るなんて……………」

「それに壁を完全に直してるし」

確かに普通の子供にはできないだろう。ただし、レイラの家系の体術属性の子供は出来る。

「君って一体何者？」

「えっと、魔法を使える人間ですね」

「それは僕らもだよ」

完全に壁が直ったのを確認したレイラは

「さあ、行きましょうか。早くしないと本当に遅れてしまいます」

と言って、変身術の教室へ向かった。

マクゴナガル先生の授業はやはり面白かった。それが、レイラの感想だった。最初はお説教から始まったけど。

「変身術は、ホグワーツで学ぶ魔法の中で最も複雑で危険なもの1つです。いい加減な態度で私の授業を受ける生徒は、出て行ってもらいますし、もちろん二度とこのクラスには入れません。初めから警告しておきます」

それから先生は机を豚に変え、またもとの姿に戻してみせた。生徒

達は感激して、早く試したくてウズウズしていたが、家具を動物に変えるようになるまでは、まだまだ時間がかかるということがすぐ分かった。さんざん複雑なノートをとった後、一人一人にマッチ棒が配られ、それを針に変える練習が始まった。

「なんだこれ……針か？」

レイラの隣でハリーがそう言うってうめいた。他の生徒もマッチの形すら変えることが出来ない生徒が多いようだ。

レイラは、というと……

一発で成功させた。

マクゴナガル先生は目を見張ったが、すぐにめったにみせない微笑みをレイラに向けてきた。

「完璧です、M s. ユオハーゼ。グリフィンドールに20点あげましょう」

グリフィンドール生から歓声が上がった。ハーマイオニーもかなりおもしろいところまでいき、さらに5点を獲得したが、彼女の表情は沈んでいるようだった。

みんなが楽しみにしていた「闇の魔術に対する防衛術」は期待はずれもいいところで、クイレルはびくついてばかりで授業は面白くなかった。レイラはクイレルのターバンの後ろに気をとられていた。

ホグワーツに着いて始めての金曜日になった。

「今日は何の授業だっけ？」

オートミールに砂糖をかけながらハリーが呟いた。

「えっと、魔法薬学ですね。スネイプ先生の」

ちなみにレイラは周りが引くくらいたっぷり砂糖をかけている。

「レイラって甘党だったんだ」

少し引き気味にハリーは言う。

「スネイプはスリザリンの寮監だ。いつもひいきをするらしい——本当かどうかは今日分かるさ」

ロンがオートミールを口に運びながらそう言った。

ちょうどその時、ふくろう便がきた。ハリーに、ハグリッドからお茶の誘いが来たらしい。レイラとロンも一緒にいくことになった。

魔法薬学は肌寒い地下牢で行われた。壁にはガラス瓶の中にアルコール漬けの得体の知れない動物がぷかぷかと浮いている物がずらりと並んでいる。

スネイプは出席をとり、ハリーのところでちよつと止まった。

「ああ、さよう」

猫なで声だ。

「ハリー・ポッター。我らが新しい——スターだね」

スリザリン生がくすくすと冷やかに笑った。

スネイプは出席をとり終わると、生徒を見渡した。

「このクラスでは、魔法薬調剤の微妙な科学と厳密な芸術を学ぶ」

そういつて話し始めたスネイプの大演説を、皆固唾を吞んで聞いていた。演説が終わると、スネイプが突然、

「ポッター！」

と叫んだ。

（ああ、あれがくるな）

「アスフォデルの球根の粉末を、ニガヨモギを煎じたものに加えると何になるか？」

ハーマイオニーが空中に高々と手を挙げた。

「わかりません」

「チツ、チツ、チー有名なだけではどうにもならんらしい」

スネイプはせせら笑った。

「ポッター、もう一つ聞こう。ベゾアール石を見つけてこいといわれ

「たら、どこを探すかね？」

「ハーマイオニーがより高く手を伸ばした。」

「わかりません」

「クラスに来る前に教科書をひらいてみようとは思わなかったわけだな、え？ポッター。」

スネイプ先生が冷たい目をしながらハリーを見る。

（私が魔法薬の調合をするときには丁寧に教えてくれたのに、ハリーにはやっぱり意地悪だなあ）

レイラは眉を潜めながらそう思った。

「ポッター、モンクスフードとウルフスベーンの違いはなんだね？」

「分かりません」

やっぱり意地悪だ。少しハリーの肩を持つか。

「スネイプ先生」

レイラは手を挙げて発言した。

「なんだ？Ms. ユオハーゼ」

「先生はキャラ立ちに必死なんですか？それとも意地悪なんですか？」

レイラの突然の爆弾発言にスネイプ先生とスリザリンだけでなく、グリフィンドールの生徒まで唾然とした。

「教科書を読めば分かるなんて……教科書さえあれば自分がいらな
いって言ってるようなもんでしょう？それにハリーだけに注意して

……」

スネイプ先生も内心ではレイラのこの発言が本心では無いことに気づいているだろう。だが、スネイプ先生の眉間にシワが刻まれた。

「M s. ユオハーゼ、君の無礼な行動により、グリフィンドールに減
て」

スネイプ先生が怒ったように言うが、その台詞をレイラは遮った。

「スネイプ先生？げんて……続きなんですか？……まあ、一番有り得ないのは減点ですね。ここで減点なんてしたら自分が必要ないって認めても同然ですよ？まさかスネイプ先生が減点なんて……しませんよね？」

レイラはスネイプ先生をじつと見つめた、そしてニヤリと笑う。スネイプ先生もレイラをじつと見つめ、口の端をひくつかせる。

周りの生徒もレイラのその笑いを見て少し驚いたように目を擦った。

見えたのだ。レイラに悪魔の羽と尻尾がついてるのを……

「……ではM s. ユオハーゼ。吾輩がポッターにした質問を全て答えられたらグリフィンドールに点をやろう」

「それはいいですね。では、………アスフォルデとニガヨモギをあわせると、強力な眠り薬である『生ける屍の水薬』になります。ベゾール石はヤギの胃から取り出す石で、大抵の毒に対する解毒薬になります。モンクスフードとウルフスベーンはどちらも同じ植物で、別名をアナコイトといいます。トリカブトという呼称が一般的です」

レイラが静かに答えるとスネイプ先生はふん、と鼻をならして言った。

「どうやら大口を叩いただけあって教科書は読んできているようだな………グリフィンボールに2点。ところで諸君、なぜ今の回答をノートに書き取らんのだ？」

みんながあわてて書き始めた。

その後、スネイプは生徒を2人ずつ組にして、おできを治す簡単な薬を調合させた。レイラはハーマイオニーとペアになった。

スネイプはお気に入らしいマルフォイ以外、ほぼ全員に注意をした。レイラとハーマイオニーのペアは完璧に調合できていたので何も言われなかった。

少し暇をもてあそばしていたレイラは、この教室で起こるハプニングを思い出してネビルに近づいた。

「ネビル、山嵐の針は大鍋を火から降ろしてから入れるんですよ」

「あ、そうだった。ありがとう！レイラ！」

「いえいえ」

遂に、グリフィンボールは減点されることなく授業は終了した。

授業がおわると、楽しみにしていたハグリッドとのお茶が待ってい

た。ロン、ハリーと3人で校庭を横切り、ハグリッドの小屋に向かった。

「くつろいでくれや。よくきてくれたな、ハリー、レイラ。そして……」
ロンのほうを見た。

「ロンですよ」

と、レイラが紹介すると、ハグリッドはロンの赤毛とそばかすを見て、こう言った。

「ウィーズリーの家の子かい。え？お前さんの双子の兄貴を森から追っ払うのに、俺は人生の半分を費やしてるようなもんだ」

（私は追っ払ないんだな）

少し不思議に思いながらもハグリッドがだしてくれたロック・ケーキに砂糖をまぶしてかぶりついた。硬くて歯が折れそうになったが、3人でおいしそうなふりをした。

食べ終わるとハグリッドに礼を言って、城に戻った。

ハグリッドに会った後寮に戻ると、

「レイラ！スネイプを出し抜いたって本当かい？」

「スネイプ、どんな顔してた？」

「真面目だと思ってたのに……」

「やっぱり、グリフィンドールだな！」

色んなグリフィンドール生から手厚い歓迎をされた。その熱気は夜遅くまで続き、冷めることはなかった。

飛行訓練と真夜中の決闘

『飛行訓練は木曜日に始まります。グリフィンドールとスリザリンとの合同授業です』

こう書かれた紙がグリフィンドールの談話室に貼り出され、1年生たちはがっかりした。だが、皆空を飛ぶ授業のことはとても楽しみにしていた様子で、そこからひっきりなしにクイディッチの話をするようになった。

ドラコはよく自慢話をしていて、ロンでさえも聞いてくれる人がいれば、チャーリーのお古の箒に乗って、ハンググライダーにぶつかりそうになった時の話をした。ハーマイオニーは「クイディッチ今昔」を図書館で借り、飛行のコツを木曜日の朝食の席で話しまくった。ハリーとロンがうんざりしているのを見て、レイラは苦笑した。ネビルは必死に聞いている。

レイラも何度か飛んだことがある。箒は、家にいくつかある古い物の中で愛用しているものを使っていた。家と離れた場所にある箒置き場に置いてあった為、燃やされることはなかったものだ。名前は、シルバーレイ。「銀の光線」という意味だ。

ニンバスやクリーンスイープのような量産型の箒が主流になる前のもので、職人が丹精こめて作った業物だ。操縦が難しく、箒が気に入った人物ではない限り、次々に事故を起こし生産中止になったが、使いこなせば最高の性能を発揮する。もともと70本しか作られていない上に事故が多発したせいで、現存するものは少ないが、今でも最高の性能を持っているらしい。柄に銀文字で「シルバーレイ」と書かれており、箒のほとんど全てがローズウッド色をしている。なぜ、『シルバー』なのかは全く分からない。だが、小枝の先の方だけが淡く銀色に染まっている。余計な装飾は一切ない。

ハーマイオニーの話が佳境にさしかかったところで、ふくろう便が

到着した。それで彼女の講義が遮られたのでみんなホツとした顔をしていた。ネビルがおばあちゃんからの、「思い出し玉」を受け取り、ドラコとひと悶着あった。

その日の午後3時半、レイラは他のグリフィン・ドール生と一緒に、飛行訓練のために校庭へ出た。校庭の反対側には『禁じられた森』が見え、そこには動物達が木に隠れるように集まっていた。スリザリン生はすでに到着していて、足元には箒が20本、整然と並んでいる。

「何をボヤボヤしてるんですか」

マダム・フーチだ。鷹のような鋭く黄色い目したおばさんが開口一番、ガミガミと言った。

「皆箒のそばにたつて。さあ、早く」

レイラは自分の箒をチラリと見下ろした。古ぼけて、小枝が何本か色んな方向に飛び出ている。

「右手を箒の上に突き出して」

マダム・フーチが掛け声をかけた。

「そして、『上がれ!』と言う」

皆が「上がれ!」と叫んだ。箒が上がったのは、レイラとハリー、マルフォイ、他数名だけだ。

マダム・フーチは箒のまたがり方、握り方を教えた。

「さあ、私が笛を吹いたら、地面を強くくっつけて2メートルくらい浮上して、降りてきてください。では、いきますよ。1・2の——こちら!戻ってください!」

ところが、ネビルは緊張するやら怖じ気づくやら、慌てて飛び出してしまったのだ。ネビルはどんどん上昇していき、真っ青な顔で地面を見下ろしている。もう高度は10メートルをこえそうだ。

「ネビルー！」

もう我慢できない。レイラは箒にのって飛び出した。マダム・フーチはもはや真っ青を通り越して真っ白だ。

感覚が研ぎ澄まされる。レイラは持ち前の身体能力で急上昇した。ネビルまであと10メートル、8メートル、5メートル、3メートル……そこでとうとうネビルが箒から落ちてしまった。高度は25メートルを超えているだろう。レイラは急降下し、ネビルに並んだ。

レイラはネビルを左手で掴み、箒を引き上げた。無事な様子のネビルに安堵する。気絶しているようだ。

スタツという音をたててネビルを抱えたレイラが地面に着陸する。もはや顔面蒼白に震えながらマダム・フーチとグリフィンドル生が走ってきた。爆笑しながらスリザリン生たちが後に続いてくる。

「無事ですか!？」

「はい、先生。気絶していますが」

「ああ、良かった……Ms. ユオハーゼ。適切な対応でした。箒の腕も素晴らしいです。グリフィンドルに30点あげましょう。」

グリフィンドル生から歓声が上がリ、スリザリン生の笑いが凍りついた。マダム・フーチは絶対に飛んではならないと厳命し、ネビルを医務室に連れて行った。

「あいつの顔を見たか？あの大間拔けの」

2人が充分に遠ざかってからマルフォイとスリザリン生がはやし立てる。グリフィンボールの得点の意趣返しといわんばかりだ。

「ごらんよー」

ドラコが飛び出して草むらの中から何かを拾いだした。

「ロングボトムのはあさんが送ってきたバカ玉だ。ロングボトムが後でとりにこられる場所においところ。木の上なんてどうだい？」

そういつてニヤリと笑ったドラコは箒にまたがり檜の木の梢まで舞い上がった。その時、レイラはマクゴナガル先生が校舎から出てくるのを見たが、他の誰も気づいていないようだ。

ちよつと、待て。早くない？

「ここまでとりにこいよ、ポッター」

ドラコが意地悪げに言う。するとハリーも箒にまたがり、飛び上がった。ハーマイオニーが止めているが、気にしていない。マクゴナガル先生は何も言わず、成り行きを見ている。

「取れるものなら取るがいいさーほらー」

そう言つてドラコは玉を放り投げた。ハリーは急降下し、その玉を掴む。そのまま草の上に転がるように軟着陸した。

「ハリー・ポッターー！」

マクゴナガル先生が走ってきた。ハリーは真つ青である。

「まさかーこんなことはホグワーツで一度も……」

そう言ってマクゴナガル先生はこう言った。

「Mr. ポッター。私と一緒に来なさい。Ms. ユオハーゼもです」

ロンとパーバティが反論しようとしたが、レイラも呼ばれたことで黙る。

ハリーはともかく、私は悪いことしたっけ？

マクゴナガル先生は歩いていき、ある教室の前に立ち止まると、中に首を突っ込んでこう言った。

「フリットウィック先生。ちょっとウッドをお借りできませんか」

その間にもハリーは真つ青になって震えている。

すぐにたくましい5年生の男子が出てきた。何事かと言う面持ちだ。マクゴナガル先生は廊下を歩き、空き教室に案内した。

「お入りなさい、3人とも」

その後ろからマクゴナガル先生が入り、扉を後ろ手に閉める。

「Mr. ポッター、Ms. ユオハーゼ。こちら、オリバー・ウッドです。ウッド、シーカーを見つけましたよ。」

狐に包まれたようだったウッドの表情がほころぶ。

「本当ですか？」

「ええ、この子は今手にもっている玉を16メートルもダイビングして捕まえました。かすり傷ひとつ負わずに。あのチャーリー・ウィー

ズリーだってそんなことできませんでしたよ」

レイラが知っている通りのやり取りが続いたが、その後ウッドがレイラを見て、「こちらは？」とマクゴナガル先生に聞いた。

「この子も20メートルほどダイビングして箒から落ちた生徒一人を助けました。素晴らしい飛行技術でした。ぜひグリフィンドールのクイディッチ・チームに入れましょう。確かいまチェイサーが一人足りなかったはずですね」

ウッドは夢が同時になったという顔をした。
(そういうことか。やっと意味が分かった)

マクゴナガル先生は部屋の窓からレイラがネビルを助けたのを見ていたのだ。それで、レイラを連れて行くつもりでグラウンドに出てみれば、ハリーがこれまたすさまじい才能を見せ付けたというわけだ。ダンブルドアに規則を曲げられないか頼んでみるとマクゴナガル先生は言い、につこり笑った。

「ハリー、あなたのお父様がどんなにお喜びになったことか。お父様も素晴らしい選手でした」

レイラは教室の外に飾られているトロフィーの欄をチラリと見た。そこには見たことのある『ジェームズ・ポッター』と書かれたトロフィーがあった。そしてその隣には、『シーナ・ユオハーゼ』と書かれたトロフィーが………。

「レイラ、あなたのお母様も大変素晴らしい選手でしたよ。あの子がグリフィンドールだったらスリザリンに大勝間違いなしだったのに

「……………」

レイラは驚いた。

「私のお母さんもクイディッチをしてたのですか？どこの寮で？」

「あの子の技術は素晴らしく、おまけにリリーとも仲が良かった……………。あの子の寮はスリザリンでしたよ」

~~~~~

「まさか」

夕食の時間、ハリーはロンに今日あったことを聞かせた。

「シーカーとチェイサーだって？なら君らは最年少の代表選手だよ。ここ何年来かな……………」

「百年ぶりだって。ウッドがそう言った。2人もいるのははじめてのことらしい」

ハリーが答えた。

「へえ、それはとてもいいことじゃん。それなのに、レイラはどうしたの……………」

ロンが恐る恐るレイラの方を見た。レイラは虚ろな目をしながらパイにひたすら砂糖を振りかけている。もう皿から溢れそうだ。

「あ…………自分のお母さんがスリザリンだった、って事にショックを受けてこうなった——ってレイラ！僕にかけないで!!」

ハリーが慌てて自分の服についた砂糖を振り払う。その時、双子のウィーズリーが大広間に入ってきた。

「レイラア！」

と、叫びながら。

レイラの近くにいたハリーとロンはパイを持ったまま、飛び退いた。双子がレイラに抱きついてきたからだ。

ガンツ

双子が勢いを殺さずにレイラにぶつかつたため、レイラは自分の砂糖まみれのパイ（もはやパイじゃないナニカ）に顔ごとつつこむことになった。

「ああっ！レイラが！」

「いや、フレッドとジョージが悪いよ今のは」

ロンが冷静につつこんだが、フレッドに頭を叩かれて床に倒れた。

「このグリフィンドール!!レイラに何してんだ！」

通りかかったマーカス・フリントが双子に掴みかかった。そこへドラコもやって来てレイラの方を心配そうな顔で見ながら、真夜中にトロフィー室での決闘をハリーに挑んでいった。

「……………痛いです……………フレッド、ジョージ……………」

レイラが顔や髪に砂糖まみれのパイをつけて、顔をしかめながら起き上がった。

「パイまみれでもレイラの美少女ぶりは変わらないね」  
「ていうか、ギャップ的なものがあっていい」

「誰のせいだと思っているのですか？せつかく新しいイタズラグッズの商品思いついたのに……………」

「何それ！」

「教えて！レイラ！」

「ダメです。忘れちゃいました、さっきの衝撃で……………」

いたた、とレイラは頭を抑えた。

「ごめんよおおおお!!!」

双子が土下座しそうな勢いでレイラに謝った。そして、ハリーとレイラを引き寄せ、マーカスに聞こえないくらいの声で、

「来週からクイディッチの練習が始まるんだ」

「ウツドは秘密にしときたいんだって」

「つまり、君達は秘密兵器だ」

と、イタズラっぽく笑みを浮かべながらそう言った。

「じゃあ、また談話室でね！」

「羨ましいな！グリフィンボール!!」

双子は追いかけてくるマーカスから走って、大広間から出ていっ

た。

「騒がしい人達です……………」

「大丈夫？ レイラ」

その日の夜、レイラはキャンキャンと叫ぶ声で目を覚ました。

「……………」

レイラは、目をこすりながらベッドから出て声のした方を見に行く。

すると、ちようどロン、ハリー、ハーマイオニーが肖像画を押し開け穴から出て行くところだった。

レイラはボーとしてそれを見送る。

(あれ?どこ行くんのだ?)

しばらくしてレイラは、はっと気がついた。

(クイディッチ、ドラコ、決闘……)

「真夜中の決闘。3頭犬。フラッツファイだ」

頭が一気に覚めていった。そして慌てて3人を追いかけるために談話室から飛び出した。

自分に姿くらましの呪文をかけて。

真夜中の廊下を1人の少女が歩いていた。

その少女、レイラは最初にトロフィー室に行ってみたが、そこにはフィルチしか居なく、慌てて来た道に戻った。

次に『禁じられた廊下』に向かおうとしていたとき、

「わあっ!?!」

廊下を飛び出してきたハリーとぶつかった。

「どうしたのハリー、何も無いのに転んじやって」

その後ろからロン、ハーマイオニー、ネビルと現れた。そしてレイラは思い出した。

(姿くらましとかなくては)

「あの、ハリー？」

「え？レッツ、レイラッ!?」

「どこから現れたの!？」

ハリー達からしたら、暗闇の中から急にレイラが出てきた事になる。叫ばなかったのは奇跡だ。

「こんなところで何していたのですか？」

「あつ、あの、先にグリフィンドールの寮に戻っていい？」

ロンが焦りながらそう言う。

「……………それでフィルチに見つかって逃げてる時に、あの立ち入り禁止と言われた『禁じられた廊下』に入ってしまったん



だ」

「床から天井までの空間全部が埋まってしまうほどの大きさ。頭が三つ。血走ったギラギラした目。三つの鼻をそれぞれの方向にヒクヒクさせていたんだ」

「そいつは僕達を目に移すと、グアっと口をあけ雷のようなり声をあげたんだよ」

寮に着いた後、ハリーから聞いた内容は大方レイラが予想していた内容だった。

## ハロウィーン 前編

それから1週間たった朝、ハリーとレイラには大コノハズク6羽が運ぶ、大きな包みが送られてきた。そしてその後、もう1羽ずつが飛んできて、レイラには2通、ハリーには1通の手紙を届けた。レイラは手紙をあけた。1通はマクゴナガル先生、もう1通はエリシヤからだった。

《包みをここで開けないように。

中身はあなたのシルバレーイです。

ハリーには新品のニンバス2000を届けました。

あなた方が箒を持ったと知れると、皆が欲しがるので、気づかないように。

今日の夜7時ウッドとアンジェリーナ・ジョンソン、ケイティ・ベルがクイディッチ競技場で待っています。

最初の練習です。

M・マク

《ゴナガル教授》

手紙を読み終えたレイラは2通目の手紙を開いた。

《お嬢様、先日マクゴナガル教授よりご連絡がありました。

寮の代表選手に選ばれたとのことで、おめでとうございます。

お嬢様のシルバレーイは私が毎週手入れしておりましたので、ご安心ください。

エリシヤ》

「ニンバス2000だって！僕、触ったことすらないよ」

ロンの声が聞こえた。

「レイラの箒は……シルバーレイ？何か、レイラのための箒みた……」  
手紙を読み進めていたハリーが何気なくレイラに話しかけると、それを聞いたロンが愕然とした顔をした。

「シ、シ、シ、シルバーレイ!?レ、レイラ、なんであれが!?乗りこなせるの!？」

え？ちよ、落ち着け、ロン。

「私の愛用の箒なのですよ」

「ってことはあの箒を本当にのりこなせるんだ！すごい！すごい！すごい！」

そう、これは「シルバーレイに乗っている」と言った時のちよつとでも箒に詳しい人なら一般的な反応だ。なにしろ、「呪われし箒」「乗り手殺し」「銀の死神」などと呼ばれているのだ。

いや、たかが箒に物騒な名前つけすぎだろ。

最初それを聞いたときは呆れてものも言えなかった。それほどに事故を起こしまくった物凄い箒。だから、それを乗りこなせる人はめちゃくちゃ尊敬される。

なぜか私は一発で乗りこなせたのだが。

そんな感じの説明をすると、2人はキラキラした目でこっちを見てくる。

こ、これは尊敬されてんのかな？

1時間目が始まる前に2人で箒を見ようとハリーとロンが出て行くけど、ハーマイオニーがやってきた。箒と手紙を見せると、ハーマイオニーは笑顔になって言った。

「おめでとう、レイラ。グリフィンドールの代表選手だなんて、すごいじゃない。しかもハリーみたいに校則を破ったのじゃなく、人を助けて手に入れるなんて、素晴らしいわ」

「まあ1年生が箒を持つこと自体、本来は校則違反なんですけどね」

それからしばらく話した後、ハーマイオニーはまた後で、と出て行った。レイラもしばらくして朝食を終え、寮に箒を置いてきた。

ハリーは一日中上の空で、箒のことばかり考えているのが隣でいてよく分かった。変身術のクラスでマクゴナガル先生は明らかにそのことに気づいていたが、何も言わなかった。レイラも久しぶりにシルバレーイに乗れることが嬉しくて、授業中そわそわとしていた。

夕食後、レイラはハリーとロンと一緒に寮へかけ戻り、箒の包みを開けた。エリシャの仕事は完璧だった。シルバレーイはぴかぴかに磨き上げられ、新品のように美しかった。ロンとハリーはニンバス2

000をひとしきり見た後、レイラのシルバレイに視線を移し、絶句した。この箒のもつ禍々しきを感じ取ったのだろう。実際にこの箒で何人か事故死しているらしい。この箒は、幸せを呼び寄せると言われているセコイアの木を使っているのだがな。

7時近く、夕暮れの薄明かりの中、ハリーと2人で城を出て、クイデイツチ競技場へ向かった。まだウッド達はきておらず、ハリーと2人で飛び始めた。

シルバレイはその評判に恥じない力を発揮した。ニンバス2000も素晴らしい箒だが、これに勝つにはおそらくファイアボルトあたりを持ってこないと厳しいだろう。今はまだ存在しないが、早く作ってほしいものだ。

「おーい！2人とも、おりてこい！」

オリバー・ウッドがやって来た。見てみると、2人の女子生徒が一緒だ。アンジェリーナとケイティだろう。

2人でウッドのすぐ隣にピタリと着陸した。

「お見事。ん？レイラ、まさかそれは……」

「シルバレイ、私の愛用の箒です」

「何い！シルバレイだとお！そっそれは……いや、何でもない。マクゴナガルの言っていた意味が良くわかった。君らはまさしく生まれつきの才能がある。ハリー、今夜はルールを教えよう。レイラ、君はチェイサーとしての実力を見させてもらおう」

そう言ってウッドはアンジェリーナ・ジョンソンとケイティ・ベルを紹介してきた。レイラはウッドからクアツフルを受け取り、彼女達と箒に乗ってパス回しやシュートの練習を始めた。2人からは即戦

力になるとのお墨付きをうけ、飛行技術を誉められた。やがてウッドはハリーへの説明を終え、ゴルフボールを使つて練習し始め、レイラ達3人はそれを見物した。ウッドが次々にほうるボールを薄暮の中すべてキャッチしたハリーを見て、アンジェリーナが口を開いた。

「すごいわね、彼。あなた、あれできる？」

「いえ、出来ないと思います」

レイラは即答した。

練習が終わった後、ウッドはとても上機嫌だった。あのままタップダンスを踊り出すんじゃないだろうか、とレイラは思った。

毎日大量の宿題が出る上、週3の練習のせいですますます忙しくなつた。毎日があつという間だった。

ハロウインの朝は、レイラはお菓子の焼ける良いにおいで目が覚めた。香ばしく、とても美味しそうだった。

今度作り方を教えてもらおう、とレイラが思っていたとき、「妖精の魔法」のフリットウィック先生がそろそろ物を飛ばす練習をしましようと言った。皆は歓声をあげた。

レイラはハリーと、ロンはハーマイオニーと組むことになった。ロ

ンがハリーを恨めしげに見て、二人ともカンカンだった。

「いいですか皆さん。ビューン、ヒョイですよ。やって見ましょう。」

フリットウィック先生がキーキー声で言つて、実技が始まった。

「ウインガーディアム　　レヴィオーサー！」

ハリーが呪文を唱えたが何も起こらない。

「ハリー、惜しいですが、ウインの部分浮遊が少し違います。こうですよ、ウインガーディアム　　レヴィオーサーよ」

レイラが呪文を唱え、杖を振ると、羽は机を離れ、頭上1・2メートルに浮いた。

「オーツ！よくできました！皆さん、見てください！ユオハーゼさんがやりました！」

先生が拍手をして叫んだ。皆も自分も成功させるべくやる気を出し始めた。

「ウインガーディアム　　レヴィオーサー！」

長い腕を風車のように振り回してロンが叫んでいる。

「言い方が間違ってるわ。ウイン・ガー・ディアム・レヴィ・オー・サ。『ガー』と長くきれいにいわなくちゃ」

このとんがった声はハーマイオニーだ。間違ったことは言っていないがそこまで頭ごなしに言われれば、ロンもむかつくだらう。

「そんなに良くご存知なら、君がやってみろよ」

と、ロンが怒鳴っている。

「ウインガーディアム<sup>遊</sup>　　<sup>せ</sup>　　レヴィオーサー！」

ハーマイオニーも成功し、フリットウィックに二人でそれぞれ5点  
ずつもらった。

クラスが終わったとき、ロンは最悪の機嫌だった。

「だから、誰だっであいつには我慢できないって言うんだ。まったく、悪夢みたいなヤツさ。レイラよりも出来ないくせに調子にのっちやあって」

ロンが廊下を歩きながらこぼし、レイラがあまりの言い様にとがめようとした時、ハーマイオニーが隣を歩いてきたハリーにぶつかつた。いそいで追い越していくその顔を見ると、泣いているのが見えた。

「今の、聞こえたみたい」

ハリーが言う。

「それがどうした？」

ロンも少しは気にしているが、フンツとそっぽを向いた。

しかし、ハーマイオニーを放ってはおけない。

「すみません、2人とも。先に行ってください」



そうやってハーマイオニーを追いかける。だが人ごみのなかで、あつという間に見失っていた。わかっているのはどこかの女子トイレということだけだから、片っ端から探す。一時間以上探していると、パーパティーとラベンダーが歩いてくるのにすれ違った。

「ハーマイオニーを見ませんでしたか？」

尋ねると、2人は暗い顔をした。

「この先の女子トイレの個室で泣いてるわ。一人にして欲しいって。一体どうしたのかし……………」

最後まで聞かないうちにレイラは走り出した。その女子トイレに着くと、個室の1つから、すすり泣く声が聞こえた。間違いない。

「ハーマイオニー、私です。レイラです。大丈夫ですか？」

「ごめん……………レイラ、一人にしてもらえないかしら」

「そうですか……………」

レイラは何も言えなかった。

こんな時は何て声をかけるべきだろうか。散々考えたが1つも名案は浮かんでこない。そのうち、自分の無力さに腹が立った。何が『生き延びた女の子』だ。何が天才だ。何が100年ぶりの1年生のチエイサーだ。何が魔力も体術も完璧に出来る、だよ。友達の一人が泣いているときに慰めることも、声をかけることも出来ないなんてただのバカじゃないか。非力で腹が立つ。無力で腹が立つ。

「……………つごめんなさい、ハーマイオニー」

とっさに出た声は震えていた。目からは涙が零れ落ちてくる。

「私、友達が泣いているのに………何も出来ないよ………」

視界が涙でにじんだ。

「ごめんなさい……ハーマイオニー。ごめんなさい……」

肩が震える。

「私………調子にのっていました。自分の才能にうぬぼれていました。自分が何でもできるつもりになっていました。一人じゃ何も出来ないくせに………友達が悲しんでいる時、慰めてやることも1つ出来ないくせに……」

そこまで言うと、突然個室の戸が開き、真っ赤な目をしたハーマイオニーが出てきた。

「レイラ………私こそ調子にのっていたわ。他人のことを、考えていなかった。……私は何て最低なの。嫌われるのも、当たり前よね………そんな私でも、友達って言ってくれて、ありがとう、レイラ」

私たちは抱き合って泣き出した。お互い、自己嫌悪に苛まれながら。これまでの行いを、心の底から後悔しながら。そこにいるのは、ただ、2人の11歳の少女が失敗し、悔やんで泣いている姿だった。

やがて泣き止むと、ハーマイオニーは真っ赤に泣きはらした目をして、言った。

「私………グリフィンドールのみんなに謝ってくる。許してもらわなきゃ。」

「私も謝らなくてはなりませんね。もう晩御飯の時間です。行きま

しよ……………」

と、その時、トイレのドアが開いた。入ってきたのは……………」

「トロール……………」

そう、レイラの頭からすっかり消えていたトロールが、そこにはいなかった。

## ハロウイーン 後編

「トロール……」

レイラは驚いてつぶやいた。転生者のレイラでも先が読めなかったから驚いたのか……と、いうわけではない。

(原作と違う………何で2匹もいるの?!)

そう、トロールは2匹いたのだ。

ハーマイオニーは愕然とした顔をした。

「そんな！なんで校内に!?は、はやく逃げましょう……」

そんなレイラ達を見逃すほど、トロールはバカではなかった。うなり声を上げ、近づいてくるトロールから逃げようと、レイラ達は後ずさるがすぐ壁についてしまう。1匹が棍棒を振り上げ、レイラ達めかけ振り下ろした。

「キャアアア!!!」

ハーマイオニーが甲高い悲鳴をあげる。

「プロテゴ<sup>守</sup>れ!

レイラの唱えた『盾の呪文』がトロールの棍棒をはじく。そのトロールが戸惑っている間に、もう1匹のトロールが2人めがけて棍棒をバットのよう<sup>れ</sup>に振った。

「——っ!!」

とつさに、腰に差していた番傘を抜いて棍棒を防ぐ。防御魔法がかかってあるこの番傘は並大抵の力じゃ折れることはない。

「っハーマイオニー、杖を出してください」

「えっ?」

突然のレイラの声にハーマイオニーは震えながら、戸惑ったような声を出した。

「そのまま扉まで走れますか?外に出て、鍵さえ閉めれば流石のトロールも出てこれないと思うので」

トロールからの攻撃を『盾の呪文』と番傘で防ぎながら、レイラはそう言った。

「わっ、分かったわ」

恐怖で震えながらも意を決したハーマイオニーは、レイラの合図で扉に向かって走った。レイラもハーマイオニーを護りながらドアに向かって走ろうとした時、

「なっ!?!」

1匹のトロールがレイラ達の進行方向に立った。まるで先を読んだみたいだ。

「そっそんな、さっきまではそこにいなかった……」

「っハーマイオニーッ!!」

思わず立ち止まったハーマイオニーめがけて目の前のトロールが棍棒を振った。

レイラはハーマイオニーを扉の方に突き飛ばした。

ドガアンツ

「レイラアアツ!!」

防御魔法をかける時間もなく、レイラは棍棒で壁に叩きつけられた。

「ゲホツ」

床に落ちたレイラは、少し血を吐いて不敵に笑った。

「やりますね……………トロールの癖に……………番傘のお陰で助かりました」

「大丈夫?!レイラツ!」

ハーマイオニーが言う。

「大丈夫です。鍵は開きましたか?」

「ダメなの!呪文かけても開かな……………きやああああ!!」

トロールがハーマイオニーめがけて棍棒を振りかぶった。

ガキインツ

間に飛び込んだレイラが番傘で棍棒を防ぐ。

「レダクトー！」

レイラがトイレに向けて呪文を放つと、トイレは粉々に壊れた。トロールがそちらに気をとられている間に、

「ウインガーデ IAM 遊　　レヴィオーサー！」

開いた番傘に呪文をかけたレイラは、それをハーマイオニーの前に浮かせる。

「ハーマイオニー！そこから動かないで下さいね！」

そう言ったレイラは、賢くない方のトロールに向かって走った。そして呪文を放つ。

「ステュービファイ！！」

それが見事命中し、そのトロールはズウンと音を立てて倒れた。

「インカーセラースー！」

そのトロールに呪文を唱える。縄がトロールの体に絡み付いた。その時、

ガンツ

もう一匹残っていたトロールがレイラの頭を殴った。色々なガラクタを巻き込んでレイラは床を滑る。と、そこに、

「大丈夫!? ハーマイオニー!!」

と、ハリーとロンが飛び込んできた。

「トロールが2匹!?!」

「てか、レイラ! 大丈夫!?!」

レイラは、ぼんやりとした頭でハリーとロンの声を聞いた。

「ハリー……………ロン……………ハーマイオニー……………」

頭から流れ出た血で片目が見えなくなった。開いた目で見えたのは、ハリー達に棍棒を振りかぶったトロールの姿だった。

(嫌だ……………失いたくない……………)

トロールが棍棒を振り下ろす。

「嫌だあああああ!!!」

レイラは叫んだ。

その時……………

ドクンッ



レイラに異変が起きた。

ボガッ

ハリーは恐る恐る目を開けた。トロールが棍棒を振り下ろしてきたが、何も痛みを感じない。

「オ、オイ」

ロンの震えた声が聞こえた。そちらを見ると目を見開いたまま、何かを指差している。ハーマイオニーは目からポロポロと涙を流していた。

ロンの指の先を見ると・・・

「っ!?!」

レイラが左腕でトロールの棍棒を防いでいた。杖は持っていない。

「レ、レイラ!?!」

声をかけるが返事はない。と、次の瞬間・・・

ドガアアアッ

レイラがトロールを蹴り飛ばした。吹っ飛んだトロールは、トイレの壁を突き破って城の外へ飛び出した。この城には防御魔法がかけられていたはず。それを突き破るほどの力でレイラは蹴り飛ばした。

トンッ

外に飛び出たトロールを追いかけてレイラは外へ飛び出した。

そこへ、

ボタン

トイレの扉が開いた。そこにいたのはマクゴナガル先生、スネイプ先生、クレイルだった。

「止めなさい！ Ms. ユオハーゼ！ 止まりなさい！」

「止めるんだ！ レイラ！」

マクゴナガル先生とスネイプ先生が叫んだ。その声にピクリと反応したレイラは宙に浮いたまま、ゆっくり振り返る。

彼女の、その目は紅く染まっていた。

「ッ!？」

「マクゴナガル先生が息をのんだ。

レイラの纏う雰囲気違和感を覚えたのだ。彼女の瞳にはこの場にいる全員を圧倒するほどの殺気を帯びていた。

その隙にトロールはレイラを棍棒で殴った。レイラは部屋の壁にぶつかった。

パラパラッ

細かい瓦礫と共にレイラは床へ降りた。そして紅い瞳のまま、言った。

「先生、あいつは俺に殺させてくれ」

その言葉に、その場にいた者は戦慄した。あのレイラ・ユオハーゼがこんなことを言うはずがない。

・・・じゃあ、こいつは誰だ？

「つ止めろ。レイラ、もうこれ以上はするな」

青ざめた表情をしたまま、スナイプ先生が言った。

「ふーん、つまんないの」

右手で杖を取り出したレイラはそれをトロールに向けた。

「セクタムセン<sup>裂</sup>プラ。ペトリフィカス・トタリス」

呪文が当たった箇所から血を出したトロールが固まって地面に落ちていった。

「さて、と。レパ<sup>直</sup>ロ」

レイラは部屋の壊れた場所を全て完璧に直した。

「手エ出して」

それが終わると、レイラはハーマイオニーに言った。

「て、手?」

「ほら、早く」

恐る恐るハーマイオニーは手を出した。その手をガツと掴んだレイラは、

「やっぱり怪我してる。エピス<sup>癒</sup>スキー」

と、呪文を唱え、ハーマイオニーの手にあつた切り傷を直した。その瞬間、レイラは目を閉じて崩れ落ちた。

「レイラ? レイラ!?!」

## 医務室

消毒の匂いと背中に感じるシーツの感覚からどこにいるのか大体は予想がついた。

「……………」

首だけを回すと、脇のテーブルにはまるで菓子屋が何店も引越してきたように、甘いものやお菓子が積み上げられていた。

起き上がろうと力を入れたレイラは、強い痛みに襲われ顔をしかめる。

「まだ、動いたらダメですよ」

突然の声に驚いてそちらを見ると、マダム・ポンフリーが手に何かを持ってやって来た。

「左腕の骨折に、頭を切っている。肋骨も何本か折れている上に体中切り傷と打撲でいっぱい」

レイラは自分の体を見してみる。すると、マダムに言われた通り、左腕は三角巾で吊るしてあり、頭と体中に包帯を巻いていた。

レイラの隣に座ったマダム・ポンフリーが手に持っていた物、薬を手渡した。

「まったく、女の子なんだから少しは気にしてくださいよ」

「はい、はい」

ゴクッ

マダムから貰った薬を口にしたレイラは苦さに顔をしかめた。

「苦い……………です……………」

「良薬は口に苦し、と言うでしょう」

涙目になりながらも、レイラは薬を飲む。その時、医務室の扉が開かれた。

「ダンブルドア校長先生！まだダメだと……………」

マダムが慌てて扉の方へ向かう。

「少しだけM.S. ユオハーゼと話させてくれんか？5分で良いのじやが」

「私も先生に聞きたいことがあるんですが……………」

ダンブルドアに続いてレイラがそう言うと、マダムに睨まれた。

「仕方ないわね。5分だけですよ？」

「ありがとう、ポツピー」

マダムが部屋から出ていくと、レイラはすぐにダンブルドアに聞いた。

「ハリーとロンとハーマイオニーは無事ですか!?私が不甲斐ないせいで彼らは怪我をしたりしていたら……………」

「大丈夫じゃよ、レイラ。3人とも怪我1つなく元気に過ごしておる」  
焦ったように言うレイラにダンブルドアは優しく言った。

「よかった………じゃあ、先生方が助けてくれたんだすね。私、トロールに殴られた後から何も覚えてなくて………」

レイラはホツとしたような、悔しそうな顔をした。だが、すぐ笑顔に戻って、

「また、大切なものを失ってしまうところでした。先生、ありがとうございます」

と言って頭を下げた。

「いや、お礼ならセブルスに言った方がよい。彼がレイラも助けたよ  
うなものじゃからな」

「スネイプ先生が………?」

「そうじゃよ。ああ、それと昨日はハロウィーンのパーティーに参加  
出来なかつたらしいのお。そんなレイラにわしからのプレゼント  
じゃ」

そう言ったダンブルドアが、カボチャパイをどこかから取り出し  
て、それをレイラに手渡した。

「わあ、ありがとうございますー!」

昨日、レイラはハーマイオニーを探すのと、トロールの事件で全く

パーティーに参加できず、何も食べていなかったのだ。

嬉しそうな顔でカボチャパイにかぶりつくレイラを微笑みながら見ていたダンブルドアが、よっころしよ、と立ち上がった。

「じゃあ、わしはこれでお」

「はい、カボチャパイありがとうございます！ごぎいます！」

笑顔でお礼を言ったレイラに、ニッコリと微笑んだダンブルドアは医務室から廊下に通じる扉に近づいた。そこでレイラは扉の前にたくさんの気配を感じた。ダンブルドアもそうだったのだろう。扉から離れた後、

「アロホモラ<sup>開</sup>」

と呪文を唱えた。

すると、次の瞬間……

「！！！！わあっ！！！！」

開いた扉からハリー、ロン、ハーマイオニー、……だけでなく、フレッド、ジョージ、ネビル、ドラコ、マーカス、セドリック、チョウ……など、たくさんの人が倒れ込んできた。

「いてて……」

「何をしているのですか？」

1番先頭にいたハリー、ロン、ハーマイオニーがレイラの声にバツ



と顔を上げた。

「「レイラッ！大丈夫!?」」

見事に3人の声が重なる。

「え、ええ。大丈夫ですよ」

若干驚きながらもレイラが言った、その瞬間、

「何しているんですか!!出ていきなさい!彼女はまだ安静にしないといけないんです!!」

医務室にマダム・ポンフリーの声が響く。

あつという間に全員が追い出され、医務室はいつもの静かな状態に戻った。

「ほら、あなたはちゃんと休息をとって」

マダムがレイラをベッドに戻す。

「あの、マダム・ポンフリー。5分でいいからハリー達と・・・」

「いいえ。絶対にいけません」

「ダンブルドア先生は入れてくださったのに・・・」

「そりゃ、校長先生ですから、他とは違います。あなたには休息がとても大切なんです」

「私、ちゃんと休息を取ります。だからお願いします！」

「・・・しょうがないですね。でも、5分だけですよ。騒いだら今度こそ彼らには出ていってもらいます」

そして、先程のメンバーが医務室に入れてもらった。

「レイラッ!!」

ハリーとロンとハーマイオニーが1番最初に医務室に飛び込んできた。

「ああ、こんなに怪我をして・・・私のせいだわ」

レイラの姿を見て、ハーマイオニーが顔を手でおおった。

「大丈夫ですよ。ハーマイオニーのせいではありません。私が無茶し過ぎただけです」

レイラは笑いながらハーマイオニーの手をとった。

「本当に大丈夫？レイラ」

「僕達何も聞かされてないんだよ」

フレッドとジョージが心配そうな顔をしながらも、ちゃっかりと菓子山から蛙チョコレートを取る。

「ええ、大丈夫です。実は私も何があったのかはよく分かっていない」

レイラも砂糖羽根ペンを手にとって包みを開けた。

「皆さんも食べて良いですよ。流石に1人で食べきれぬ量ではありませんので」

レイラの言葉に、ロンがバーティ・ボッツの百味ビーンズを手にとった。

「ほんと、元気そうで良かったよ」

ロンが口に百味ビーンズを放り込み、その途端顔をしかめた。

「芽キャベツだ」

「こんなにお菓子がたくさんあるところでこれを渡すのは申し訳ないけど、はい、レイラ。お見舞い」

チョウが紙袋をくれた。その中には、ドルーブルの風船ガムや、大鍋ケーキなどがたくさん入っていた。

「わあ！ありがとうございます、チョウ！」

「喜んでもらえて嬉しいわ」

チョウが天使のような微笑みを見せた。

次にフレッドとジョージがニヤニヤと笑いながら、

「じゃあ、俺達からは」

「イタズラグッズをプレゼントだ！」

と、袋いっぱいイタズラグッズをくれた。

「おとり爆弾とか、インスタント煙幕とか」

「新しく作っただまし杖とかもあるんだぜ！」

まるで小さい子供のように目を輝かせて説明する2人に、レイラは苦笑した。

「機会があれば使わせていただきますね」

他にも、マーカスが『クイディッチ今昔』という本をくれたり（どこからレイラがクイディッチをするという情報を仕入れたのだろう）、ネビルが大量の百味ビーンズをくれたり（お菓子の山をチラチラと見ていたので、その中から何個かをあげると、とても喜ばれた）、セドリックが色の変わる羽根ペンと羊皮紙、薬瓶をくれた（セドリックファンに殺されるかもしれない）。

楽しいひとときはあっという間に過ぎる。

「もう30分も経ちましたよ。さあ、出なさい」

そうマダムに言われた時は、みんな広げていた荷物を慌てて片付けた。

「じゃあな、レイラ」

「早く元気になってね」

1人ずつ、名残惜しそうに医務室から出ていく。レイラは、一生医

務室から出られない訳じゃないのに、と思いながら手を振って、みんなを見送った。

みんなが出ていった後、最後にドラコが残った。

「どうしたのですか？」

レイラが声をかけると、

「これ、お見舞いだ」

と、真っ赤な顔で言われて、紙袋がベッドに飛んできた。

「わっ」

慌ててそれを受け止める。

「は、早く怪我治してよっ」

バタンツ

「・・・はい」

ドラコが走って医務室から出ていった。

「何をくれたのでしょうか？」

レイラが紙袋を開くと、そこにあったのは・・・

「わあ、とてつもなく高そうだがセンスの良いマフラーが・・・」

はい、説明してくれましたね。

そこに入っていたのは、銀色と淡い水色の縞模様の高級そうなマフラー。その端の方には白色で紅い目の小さな兎が刺繍してあった。

「嬉しいです・・・ありがとうございます、ドラコ」

もうその本人はこの場に居ないが、レイラはお礼を言った。

## クイディッチ

11月に入ると、とても寒くなった。学校を囲む山々は灰色に凍りつき、湖は冷たい鋼のように張りつめていた。窓から見下ろすと、クイディッチ競技場のグラウンドで箒の霜取りをするハグリッドの姿が見えた。

クイディッチシーズンの到来だ。何週間もの練習が終わり、土曜日は、いよいよハリーとレイラの初試合になる。グリフィンドール対スリザリンドだ。

寮チームの秘密兵器として、ハリーとレイラのこととは、一応『極秘』というのがウツドの作戦だったので、2人が練習しているところを見た者はいなかった。ところが、ハリーがシーカー、レイラがチェイサーだという『極秘』は何故かとつくに漏れていた。

2人のデビュー戦の前日のこと、2人はロン、ハーマイオニーと一緒に、休み時間に凍りつくような中庭に出ていた。あのトロール事件から、ハーマイオニーは、ハリーとロンと仲直りできたようだ。

「あー、寒い寒い！」

ロンが震えながら中庭に座った。

「あら、レイラ。そのマフラー良いわね」

レイラの巻いているマフラーに気づいたハーマイオニーが笑顔で

そう言った。そのマフラーはドラコがくれた、銀色と水色の縞模様のマフラーだった。

「ありがとうございます。友達がくれたんです」

レイラも笑顔でそう返した。

ハーマイオニーが魔法で出した鮮やかなブルーの火は、ジャムの空き瓶に入れて持ち運びが出来る火だった。背中を火にあてて暖まっていると、スネイプがやって来た。片足を引きずっていることにハリーは気づいたようだ。火は禁じられているに違いない、そう考えたのだろう、ハリー達3人はピツタリくつついた。だが、レイラだけは違った。

「あ、スネイプ先生！」

自らスネイプに近づいて、ハリー達を慌てさせた。

「この前のトロールの時に助けてくださったと聞きました。ありがとうございます！」

「あ、ああ」

笑顔でそう言われ、スネイプは驚いたような表情をした。

「では、私はこれで」

ハリー達の方へ走っていくレイラを困惑した顔で見送ったスネイプ。戻ってきたレイラにハリー達も困惑していた。

「何でお礼なんて言ったのさ」



「トロールの時に助けてくださった、とダンブルドア先生から聞きましたので」

レイラがそう言うと3人は納得したようなしてないような顔でうなずいた。

その夜、グリフィンドールの談話室は騒々しかった。ハリー、ロン、ハーマイオニー、レイラは一緒に窓際に座って、ハーマイオニーとレイラがハリーとロンの呪文の宿題をチェックしていた。途中でハリーがいつ奪われたのか、『クイディッチ今昔』をスネイプのところに取りに行ってくる、と言っていた。

レイラは落ち着かなかった。

「ねえ、レイラ。試合、絶対見に来いよ」

「じゃないと僕ら泣いちゃうからね」

赤毛の双子が先程から同じ様な事をずっと言っているからだ。レイラは一緒に試合に出るのに、いい加減離れてくれないかなあ、そんな事を考えていたレイラは、ハツと気づいて、ニヤリと悪魔の笑みを浮かべた。ハリーの宿題をチェックし終えた後、レイラは双子に声をかけた。

「すみませんが、試合を見ることはできません」

「えっええええ!!」

「うっそおお!!」

双子にそう言うと、MAXに機嫌を損ね、暗いオーラを発しなくなりながら、リーに泣きついた。

「どうしよおお…」

「レイラがああ…」

「何があるのおお？男？ねえ、男なんですよ？」

「彼氏？彼氏なの？」

「…お前ら、馬鹿か？もしくは阿保なのか？」

呆れたように言うリーの正論にますます悲しくなったのか、結局双子はレイラの元に戻ってきた。

「ねえ、本当に見ることは出来ないの？」

「はい、見ることは出来ません（笑）」

ことこのなり行きを見ていたロン、ハーマイオニーには、レイラに悪魔の羽が生えているのが見えた気がした。

「ごんなあ！」

双子がレイラに泣きついた。流石にかわいそうになってきたレイラは、ニコツと笑って言った。

「ですが、試合に出ることは出来ますよ」

「えっ？？」

双子は同時にレイラの方を向いた。

「あ、そうだった・・・」

「レイラはチエイサーだった」

その時の双子の顔をレイラは一緒忘れないだろう。

夜が明けて、晴れ渡った寒い朝が来た。大広間はこんがり焼けたソーセージの美味しそうな匂いと、クイディッチの好試合を期待するウキウキとしたざわめきで満たされていた。

「朝食、しつかり食べないと」

「そうですよ、ハリー」

青白い顔をしたハリーは全然朝食に手をつけていない。その横で、レイラはいつも通り甘いものづくしの料理を食べていた。それも、そんな華奢な体のどこに入っていくのか、という量を。

「何も食べたくないよ」

「トーストをちよつとだけでも」

ハーマイオニーが優しく言った。

「お腹すいてないんだよ」

ハリーは目の前の料理を見つめながらそう言った。

11時には学校中がクイディッチ競技場の観客席につめかけていた。双眼鏡を持っている生徒もいる。

一方、更衣室では、選手達がクイディッチ用の真紅のローブに着替えてウツドの演説を聞いていた。

「よーし、さあ時間だ。全員、頑張れよ」

ウツドの声にレイラは気を引き締める。今頃になって、やっと緊張してきた。膝が震えませんようにと祈りながら、『シルバーレイ』をぎゅっと握りしめる。

フレッドとジョージの後について更衣室を出ようとした時、

ポンポン

2つの手に、頭に軽く触れられた。

「え?」

ポカンとしてレイラは頭に触れると、目の前にいたフレッドとジョージがニヤリと笑った。

「レイラでも緊張するんだなあ」

「緊張しなくていいぜ、レイラに近づいたブラッジャーは俺達が全部弾き落とすから」

そして、くるっと方向転換した双子はそのまま競技場に出ていった。その後ろ姿を驚いた顔のまま見つめていたレイラは、クスリと笑った。

(人に頭撫でられたの初めてだ)

「ありがとうございます」

ポツリと呟いたレイラは、双子に続いて競技場に出た。その時にはもう、緊張はしていなかった。

大歓声に迎えられてフィールドに出る。

「さあ、皆さん。正々堂々と戦いましょう」

審判はマダム・フーチだ。どう見てもスリザリンのキャプテンのマーカス・フリントに向けて言っていると思った。

「手加減なしだぞ?」

マーカスがレイラに向けて言う。

「当たり前です。ファールはいけません」

マーカスに言われたレイラは不敵な笑みを浮かべた。

「よーい、箒に乗って」

ハリーはニンバス2000に、レイラはシルバーレイにまたがった。レイラは自分の上に、魔法で番傘を浮かす。マクゴナガルはレイラの体質のことを知っており、ダンブルドアにかけあって、レイラが

番傘を差していいことになった。

フーチ審判の銀色の笛が高らかになり、15本の箒が舞い上がった。試合開始だ。

レイラの銀髪のポニーテールが、風を受けてさらさらと舞う。

レイラは、放り投げられたクアツフルを掴み、そのまま一気に急上昇する。唾然としているスリザリンの選手達を尻目に次は急降下。3つのゴールのうち、左を狙ってシュート。決まった。

レイラは怪我が治ってから1週間激しい運動は禁止と言われていたので、他のみんなよりも練習時間は少ない。だが、その差すら無いような綺麗な飛びかたをしている。

真っ先に我に帰ったマダム・フーチがホイッスルを鳴らす。解説のリー・ジョーダンも呆然としていたが、すぐに仕事を思い出す。

「グ、グリフィンドール 先取点！」

グリフィンドールの大歓声が響き渡った。とりあえず10点。だが、こんな物では終われない。

「あ、またグリフィンドールのチェイサー、レイラ・ユオハーゼがクアツフルを取りました。——飛んできたブラッジャーを華麗にかわす——そのブラッジャーを、ウィーズリーの双子がもうスピードで追いかける——なぜでしょう、ブラッジャーは2つもあるのに」

それを聞いたレイラは、バカ・・・とため息をついた。

「——ま、いいか。さあ、ユオハーゼ選手、もうゴールは目の前だ

——あつ、スリザリンのキャプテン、マークス・フリントが、  
ユオハーゼ選手の前に立ちはだかりました—— ユオハーゼ  
選手、これを予想していたのか、左にいたジョンソン選手にパス——  
——ジョンソン選手はクアツフルを手にゴールに向かって飛びます  
——頑張り、今だ、アンジェリーナ—— キーパーのブレッツチ  
リーが飛びつく—— がミスした—— グリフィンドール、追加  
点!!」

グリフィンドールの大歓声がまた、寒空いっぱい広がった。

「ナイスパス！レイラー！」

「ありがとうございます」

その後、スニッチに気づいたハリーにタックルしたマークスに嚴重  
注意、そのおかげで得たペナルティーシュートでまた10点追加し  
た。

さらにグリフィンドールの攻撃が続く中、ハリーの箒に異常が起き  
た。振り落とされそうになっている。

「ハリーー！耐えてくださいー！」

グルグルと旋回し始めたハリーから目を離したレイラーは、すぐに観  
客席を見た。

クイレルとスネイプが2人、ハリーのほうにむけて、目を離さずに  
言葉を紡いでいる。念のために唇の動きを見ても、クイレルが呪い、  
スネイプが反対呪文を唱えていた。

そこまで見たとき、突然スネイプのローブが燃えあがった。そし  
て、その後ろには逃げ去っていくハーマイオニーの姿が。2人とも炎  
に気を取られ、詠唱をやめた。ハリーの箒は落ち着きを取り戻した。

その後、レイラが50得点、アンジェリーナとケイティが20得点  
づつ決めた時、ハリーがスニッチを見つけた。飲み込んでしまったも  
のの、しっかりと掴み、試合終了。終わってみれば260―0。グリ  
フィンドールの圧勝だった。

試合の後、レイラとハリー、ロン、ハーマイオニーはハグリッドの  
小屋を訪ねていた。ハグリッドが入れてくれた濃い紅茶を、レイラは  
少しずつ飲みながらハリー達の話聞いた。

「スネイプだったんだよ」

とロンが説明した。

「ハーマイオニーも僕も見たんだけ。君の箒にぶつぶつ呪いをかけてい  
た。ずっと君から目を離さずにね」

ハリーは驚いていたが、ハグリッドは信じていない。レイラは紅茶  
をテーブルに置き、口を挟んだ。

「呪いをかけていたのはクイレルですよ。スネイプ先生は反対呪文  
をかけていたんです。それくらい唇の動きを見れば分かりますよ」

それを聞いてロンは黙ったが、ハリーはあきらめない。

「でもスネイプはハロウィーンの日、3頭犬の裏をかこうとして噛ま  
れてたじゃないか！」

ハグリッドはティーポットを落とした。

「なんでフラッツフィーを知ってる?」

「フラッツフィー?」

「そう、あいつの名前だ・・・去年パブで会ったギリシヤ人から買った  
んだ。ダンブルドアに貸した。守るため」



「何を？」

「もうこれ以上は聞かんでくれ。お前さんたちは関係のないことには首をつっこんだら。危険だ。あれはダンブルドアとニコラス・フラメルの……」

「あつ！」

ハリーは聞き逃さなかった。

「ニコラス・フラメルって人が関係してるんだね？」

「ニコラス・フラメル。著名な錬金術師です。今年で665歳でしたよね。ダンブルドアの名前が出てくるということは……あの犬が守っているのは多分『賢者の石』ってところでしょうかね」

ハグリッドは口を滑らせた自分自身に猛烈に腹を立てているようだった。

## クリスマス休暇 前編

もうすぐクリスマス。12月も半ばのある朝、目を覚ますとホグワーツは深い雪におおわれ、湖はカチカチに凍りついていた。双子のウィーズリーは雪玉に魔法をかけて、クイレルにつきまとませて、ターバンの後ろでポンポン跳ね返るようにしたという理由で、罰を受けていた。

レイラはそれを聞いて、雪玉の1つがクイレルの後頭部にいるヴォルデモートに当たればいいのと思った。

みんなクリスマス休暇が待ち遠しそうだった。グリフィンドールの談話室や大広間には轟々と火が燃えていたが、廊下はすきま風で氷のように冷たかった。1番寒かったのはスネイプ教授の地下牢教室で、みんなの吐く息が白い霧のように立ち上ぼっていた。

レイラは小声で、

「アピ<sup>暖</sup>ーラ・ソル<sup>め</sup>ヒート<sup>よ</sup>」

と、呪文を唱えて体を暖め、ドラコに貰ったマフラーを首にできるだけ巻いていた。

「かわいいそうに」

魔法薬の授業の時、ドラコが言った。

「家に帰ってくるなど言われて、クリスマスなのにホグワーツに居残る子がいるんだね」

そう言いながらハリーの様子をうかがっている。クラブとゴイルがクスクス笑った。

「次の試合には大きな口の『木登り蛙』がシーカーになるぞ」

スリザリンが負けたことを、まだ根に持っているドラコがはやし立てた。だが、誰も笑わない。乗り手を振り落とそうとした筈に見事にしがみついていたハリーに、みんなはとても感心していたからだ。

妬ましいやら、腹立たしいやらで、ドラコはまた古い手に切り替え、ハリーにちゃんとした家族がないことを嘲った。

そのドラコの全ての言葉はレイラにも突き刺さっていた。

「……………私も家族や親戚も、みんな居ないんですよ。家も燃やされちゃったし……………」

レイラはポツリと呟いた。その呟きは誰にも聞かれることはなく、宙に消えていった。

魔法薬のクラスを終えて地下牢を出ると、廊下には針のような縦の葉がたくさん散らばっていた。

「……………エバ<sup>消</sup>ネス<sup>え</sup>コ<sup>よ</sup>」

ため息をつきながら呪文を唱えると、ちょうどそこにマクゴナガル先生がやって来た。

「ああ、M.S. ユオハーゼ。ありがとう。グリフィンドールに5点追

加

「……………ありがとうございます」

「瀨をはやみ 岩にせかるる 滝川の」

中庭で、ふと思い出した百人一首を日本語で口にする。

「【われても末に あはむとぞ思ふ】……………」

近くにいたボウトラックルの兄弟やニフラーの親子達が、遊びをやめてレイラの方をじっと見つめた。

「……………何でもありませんよ」

その視線に気がついたレイラは優しく微笑んだ。

遊びを再開した彼らは、そのうちレイラから離れて鬼ごっこを始めた。その姿を見ながら、レイラは呟いた。

「……………逢いたいな」

「誰にだ？」

すぐ側で声がした。番傘を少し上げて、横に立っている人物を確認する。

「ドラコですか……」

「何だ、僕が居ちや悪いか？」

「いえ、そう言うわけではありません」

よいしょ、とドラコがレイラの隣に座る。

「……………クリスマス、残るらしいな」

「はい」

「何故だ？家で家族が待っているだろう？」

そこまで言つて、ドラコはハッと気がついた。

「すまない……………」

「いえ、大丈夫です。——私が住んでいた家は燃やされたんです」

「誰にだ？」

「【死喰い人】です」

ドラコが目を見張ったのが見えた。

「すまない、僕の父親もいたかもしれない……………」

「いえ、ドラコのせいでも、ルシウスさんのせいでもありませんよ。だって今生きているではありませんか。…………【あの時、私の家を燃やした奴らは全員死んだから】」

レイラの言葉にドラコは首をかしげた。

「今何て…………」

「まあ、そう言うわけで私はこの冬、帰るつもりはなのです。来年には

帰れると思いますが」

そこまで言うと、レイラは立ち上がってローブについた埃を払った。何か言いたそうにしていたドラコも慌てて立ち上がった。

「グリフィンドールのどこまで送るよ」

「ありがとうございます。ですが、あまり近づきすぎるとグリフィンドールの人達にイタズラされてしまいますよ?」

「その時は仕返しするよ」

ドラコがニヤリと笑った。それにつられて、レイラも笑顔になった。

クリスマス・イブの夜。レイラはプレゼントの事なんかすっかり忘れていた。そもそも今まで友達が居なかったから。

翌日の朝、レイラは早くに目が覚めると、枕元にはプレゼントが山のように積み重なっていた。

……いや、こんなにもらう当てあったっけ?

差出人を見ると、ほとんどがホグワーツの男子生徒からの物で、一緒に愛のこもった手紙が入っていた。寮に関係なくきている。あれ、スリザリンの人からもだ。

聞いた事もない名前の人も多くあつて、ちよつと面食らつたが、せつかくのプレゼントなので捨てるのも失礼だと思い、一つ一つ開けていった。怪しげな物には「ス化ペけシアリスの皮・レ剥ベリオが」と唱え、危険性があればその場ですぐ、燃やした。

時々、知っている人の名前（マーカスやセドリック、チョウなど）があり、その人達からのプレゼントはまともなものが多かつた。

でも、知らない人達の中には「愛の妙薬」を仕込んでいるお菓子なんかもあつて、お菓子に罪は無いのに……と思ひながらも最大火力の燃インえセンよディオで焼却した。

ありがたいプレゼントもあつた。箒の手入れセットやチェスの駒、呪文の本なんかだ。差出人は全く知らない別の寮の人だつたが。

ウィーズリー家から、暖かそうな手編みのセーターが送られてきた。色は桔梗色。胸元には銀色でRというイニシャルの刺繍が入っていた。

ハグリッドからはロックケーキ、エリシヤからは好物の砂糖かけ三色団子が届いた（エリシヤに作り方を教えたら、毎日のように作ってくれるようになった）。

ハーマイオニーからは、『クイディッチの箒く今昔く』という本が送られてきた。見たことの無いもので、とても面白そうな本だ。

フレッド、ジョージからは自動インク羽根ペンや噛みつく宝箱など、一癖ありそうなプレゼントがたくさんきた。

ドラコは高級そうなお菓子のセットをくれた。

そして一つ、差出人のわからないものがあつた。袋には小さな兎のぬいぐるみが入っていて、同封されていた手紙には、

《ユオハーゼ宗家の者へ

追放さ

れし分家の者より》

と、書かれていた。

ウィーズリー家の、暖かそうな桔梗色のセーターを着てグリフィン  
ドールの寮へ戻ると、ロンもハリーも起きていて、プレゼントを見せ  
合っていた。

レイラが大量のプレゼントとラブレターをもらったと知ると、2人  
は微妙な表情だったが、もらったお菓子は一人で食べきれないから皆  
で食べようと言うと、嬉しそうに顔をほころばせた。

ハリー達と一緒に大広間に行くと、小さなツララでキラキラ光るツ  
リーもあれば、何百というろうそくで輝いているツリーもあり、とて  
も面白そうだった。

テーブルにつくと、青いセーターを着た（イニシャルつきの）フレッ  
ドとジョージが話しかけてきた。

「メリークリスマス、レイラー！」

「メリークリスマス、フレッド、ジョージ」

「俺達のプレゼント見たか？」

「新しいグッズ達だぜ！」

「ええ、ありがとうございます。とても面白そうな物がたくさんあり  
ましたね」



レイラはローストポテトに手を伸ばしながらそう返す。

「今度誰にイタズラしましょうか……」

「先生達にもかけてみたいよな」

「監督生でもいいぜ」

双子の側にいたパーシーがギクツとして、そそくさと双子から離れた。

「今はとりあえず、パーティーを楽しみましょうか」

そんなパーシーの様子を見て、レイラは苦笑した。

昼過ぎ、ハリーとレイラはウィーズリー四兄弟と猛烈な雪合戦を楽しんだ。

魔法をかけた雪玉を飛ばして、相手にぶつける。レイラは自分の周りに「防御呪文」を唱え、雪玉が当たらないようにした。

「ずるいよ、レイラ……」

「いえ、これも戦略の1つですよ、ハリー」

羨ましそうな顔で見ってくるハリーに、レイラは容赦なく魔法で飛ばした雪玉を当てた。

「レイラって……」

「敵にまわしたら凄く厄介な相手になるんじゃない……」  
「そうですね、褒めているのですかね？」

呆気にとられていた双子の顔にも雪玉をぶつける。

「味方でよかった……」

「同感だ、弟よ」

その様子を見ていたロンとパーシーが少しだけ引いている気がしたのは気のせいだろう。

「冬なのに暑い……」

汗だくになったウィーズリー四兄弟とハリーがそう言いながら、グリフィンボールの寮に帰ってくる。

「暑いよ〜レイラ〜」

「僕達溶けちゃうよ〜」

ウィーズリーの双子が、息切れせず寮に帰った途端本を読み始めたレイラに言う。本をパタンと閉じたレイラがニッコリ笑った。

「人間はそんなことで溶けません。しかし、そのまま溶けてしまった場合は、外の雪山に投げ込んであげますよ2人とも」

「「なんか、冷たい………」」

レイラの周りをクルクルと回っていた双子がレイラから少し遠ざかった。

「魔法かけましようか？」

ニコニコと笑いながらレイラは言う。

「最大級の【凍結魔法】をかけてあげましよう。きっと、先生方が氷のオブジェとして大広間に飾ってくれますよ」

「え、何それ。ある意味凄い」

「笑いながら言えるところもギャップでいいけどさあ」

「「それ、死ぬよね」」

「いいえ、仮死状態になるだけですよ。ちょうど実験台が欲しかったんです」

さあ、とレイラは杖を取り出した。双子は青ざめた顔をする。

「ちよ、ホントに死ぬ！」

「死にませんって」

「助けて！パーシー！」

「僕まで巻き込むのはやめて欲しい」

「「ハリー！・ロン！」」

「さて、ハリー、宿題するか」

「そうだね、ロン」

兄にも弟にもハリーにも見捨てられた双子は談話室を走ってレイラから逃げようとする。

「大丈夫ですよ、フレッド、ジョージ」

「それが大丈夫って言っている人の顔か!？」

フフフ、とレイラは悪魔の笑みを浮かべている。

「さて、どちらからがいいですか？」

「ぎゃああああ!!!」

壁に追い詰められた双子が悲鳴をあげる。

「<sup>風</sup>ヴァインタス」

レイラが呪文を唱える。覚悟を決めた双子はスツと何かを悟ったような表情をした。すると、急に、双子にちょうどいい強さの風が吹いてきた。

「えっ?」

「冗談ですって。私がそこまですると思いましたが?」

まだ、状況がつかめていない双子は目をパチクリさせた。

「ど、どーいう……」

「イタズラがしたかっただけです」

ニヤリとレイラは笑う。してやられた、双子は同時にそう思った。

「涼しいでしょう?」

「うん……でも冗談キツいよ」

「本当に死ぬと思った……」

「それはすみません。でも楽しかったので」

じとー、と双子はレイラを見た。

「誰得だよ」

「私得です」

「だよね」

さてと、と、レイラは椅子に置いてきた本を手を取った。双子はまだ呆然としている。

「私は図書室に行つてきますね、この本返してきたいので」

そう言つてグリフィンドールの出口に向かったレイラは、途中で止まり、振り返った。

「2人ともいい顔してましたよ。イタズラされるのには慣れてないみたいですね」

ニコツ

他の人から見たら、天使の笑みであろうレイラの笑顔は、双子にとってはその時、悪魔の笑みに見えた。

「やるなあ、レイラ」

レイラが談話室から出た後、ロンが呟いた。それに同意したハリー

は、首を何度も縦に振る。

「逆らわない方が身のためだと思いはじめた……」  
「確かに……」

クリスマスパーティー〜マルフォイ家〜

ヒュンツヒュンツ

真夜中の中庭。レイラは魔法で作った木刀で素振りしていた。剣先がぶれないように、意識して同じ軌道をなぞる。

「…………ツハア、ハア…………」

百回くらい素振りした後、一度休憩するために地面に寝転んだ。

(……………星、綺麗だなあ)

ホグワーツの光は全部消えていて、そのお陰で星がキラキラ光って見えた。

「……………ん?」

じつと目を凝らすと、そのうちの1つの星がどんどん近づいてきた。画面いっぱいに白が広がる。

ガツンツ

「……………っ!」

ホーホー

落ちてきたのはレイラのふくろうのルナだった。そのくちばしが、ちょうどレイラの眉間に当たる。

「……………っ!? あ、何だルナか」

ホー

「あなたは人の嫌がることをするのが上手ですね……」

苦笑しながら、レイラはルナを抱える。すると、ルナの足に1つの手紙がくくりつけられているのに気がついた。

「……………レイ宛てですか」

その手紙は、マルフォイ家からのクリスマスパーティーへのお誘いだった。

「まあ、いいですか。楽しそうですし。それに私がない間は何とかしてくれるでしょう？ ダンブルドア先生？」

レイラは、暗闇に向かって声をかけた。ついでにニコリと微笑みかける。

「……………ほう、わしに気づいたか」

暗闇からダンブルドアがスツと現れた。

「それで、これに行ってもよろしいでしょうか？」

「わしは別にいいと思うが、君がいない間ウィーズリーの双子が意気消沈するのが想像できるぞ」

レイラは想像して苦笑いした。お葬式状態のなって、ハリーとロンが困りそうだ。



「ダンブルドア先生、どうかしてくださいよ」

「かわいい生徒の頼みじゃ、どうかはしてやろう」

「ありがとうございます」

どうにか、のところが引つ掛かったが、まあ大丈夫だろう。

「では、鍛練もほどほどにして早く寝るのじゃぞ」

「はい、ではおやすみなさい」

ダンブルドアは現れた時と同じように、スツと暗闇に消えた。

翌日の夕方。レイラは姿あらわしをしてマルフォイ家に行った。  
今日の格好はドラコとお揃いの黒いタキシードだ。

「よく来たね！レイ！」

家のベル鳴らすと、ドラコが満面の笑みで迎え出てくれた。

「久しぶりだな、ドラコ」

レイラも笑顔で挨拶する。ドラコの案内で、レイラはパーティー会場に向かった。

キラキラと輝いているツリーに、とても大きなシャンデリア。目がチカチカするほど、見える光景全てが光輝いていた。思わず目を細めてしまう。

「どうした?」

それに気づいたドラコが声をかけてきた。

「いや、前来たときよりも輝いている、と思ってな」

レイラがそう言うと、ドラコは苦笑した。

「クリスマスだからな」

「ああ、なるほど」

クリスマスは輝くためにあるのか、とレイラは思った。パーティー会場にいるほとんどの人（主に女性）の服はあらゆる場所が輝いており、アクセサリーとしてしているのか、重そうな宝石がキラキラと光に反射している。

「じゃあ、子供達の輪に入ろうか」

ちょうど目が痛くなってきたところで、ドラコが声をかけてくれた。歩き始めたドラコについていくために足を速める。

「あ、ドラコ！どこ行ってたんだよ・・・って、ユオハーゼ殿!?!」

1番始めにセオドール・ノットが気づいた。

「やあ、セオドール。3年ぶりかな?」

「は、はい!」

ノットの裏返った声に、他の子供達もレイラに気づいた。

「ユオハーゼ殿!?!お、お久しぶりです!」

「久しいな、ブレーズ」

「レイ様!お元気でしたか?」

(レ、レイ様?)

「ああ、僕は元気だ。君達はどうか?」

「」「元気です!」「」

子供達のほとんどがレイラに声をかけてきた。3年前に会ったことがある人や、新しく知り合った人もいる。

(でもなあ・・・)

「なあ、ドラコ。レイ様って何だ?様付け?」

「僕も分からないよ。ホントに何だろうね」

ドラコは、『ドラコ様』と呼ばれるのに慣れているのか、苦笑で済ましている。流石は名家の息子だ。

と、そこヘルシウスがやって来た。

「お久しぶりです、ユオハーゼ殿。このパーティーにご出席いただき、本当にありがとうございます」

そう言って深く礼をしたルシウスに、レイラは言葉を返した。

「いや、こちらこそ誘ってくれてありがとう」

レイラも会釈をする。

「ところで、ルシウス殿。少し、真面目な質問があるのだが」

【死喰い人】についての。

最後の文は口パクで伝えたレイラの言葉に、ルシウスの顔には一気に緊張が走った。

「・・・あちらで話しましょう」

「分かった」

ルシウスについて歩くと、ベランダに出た。

周りに気配を配って、誰もいないことを確認する。

「それで、話とは・・・」

「ああ、すまない。大したことではないのだが」

レイラはスツと目を細めた。

「私の家を燃やし、叔父様を殺したのは貴様の命令か？ルシウス」

2つの緋色の瞳がルシウスをじっと見つめる。その瞬間、周りの木々がザワザワと揺れ始めた。

「——っ！」

たった1人の少女の視線に、ルシウスは動きを制された。まるで、何かルシウスの体にのしかかっているくるようだ。紅く光る瞳が、全てを見透かすように細まる。

「さあ、貴様の口から語れ。真実を」

ゴクリとルシウスは唾を飲み込んだ。

「あ、あれは・・・私の命令では、ありません」  
「・・・そうか」

フツとルシウスにかかっていた重しが消えた。それと同時に険しかったレイラの顔が元の笑顔に戻る。

「すまない、疑ってしまって。私は真実が知りたかっただけなのだ。だが、またからぶってしまったな」

レイラは苦笑しながらそう言う。

「また？」

「ああ、何人かの【死喰い人】にもさつきと同じような事をしたのだが・・・。全て違っていてな」

すまない、ともう一度レイラは謝る。その顔には暗い影が降りていた。

レイラが子供達の輪に戻ると、女の子達が何か話をしていた。

「・・・あの、レイ様と同じ名字のグリフィンボール、あの子ウザいわよね」

「同じ名字なのが羨ましい！」

「今度——」

そこまで聞いたところで、女の子達はレイラが帰ってきている事に気がついた。

「お帰りなさいませ、レイ様！ルシウス様と何を話されていたのですか？」

「あ、ああ。少し、な。ところで、先程話していたことは・・・」

「レイ様には関係ないことです。それよりもあちらで私と踊りませんか？」

はぐらかされた。

「いや、遠慮しとくよ。僕はドラコと話がしたいから」

「そうですか、残念です」

早々に話を切り上げ、レイラはドラコの方へ歩いた。あの女の子達との会話には慣れない。いつも何かを企んでいるような感じがする・・・。

## みぞの鏡

翌朝、レイラは何事も無かったかのようにグリフィンドールの談話室のソファアーに座って、本を読んでいた。まだ、朝早いので誰も起きていないのだろう。談話室は心地よい静けさがあった。だが、その静けさも後数十秒で崩れ去ることになる。

「レイラア!!!」

大声で談話室に飛び込んできたのは赤毛の双子だった。そして、その勢いのままレイラに飛び付こうとする。

(<sup>守</sup>プロテゴ)

本を読んだまま、レイラは自分の前に無言で防御の壁を張った。

「ぶはっ!!!」

見事にその透明な壁にぶつかった双子はそのままズルズルと崩れ落ちた。

「痛いよお、レイラア」

「僕達が何したって言うんだよお」

「まず、その早朝テンションをどうかしててください」

本から目を離さずにレイラは言う。双子は、頬を膨らませながらレイラの後ろにまわった。

「僕達は君を心配してたんだよ?」

「廊下で急に倒れたってダンブルドアが言ってたよ?」

「それで医務室に運ばれたって」

「……………はい?」

レイラは思わず双子の方に振り返った。そしてダンブルドアとの会話を思い出した。

(あー、あの狸じじい何がどうにかする、だ。余計に心配かけてんじやねえか)

レイラは持っていた本を握りつぶした。

「あー、はい。そうらしいですね、はい。…あらら、ホンガツブレチャイマシタネ」

笑みを浮かべたレイラは本にレ<sup>直</sup>パロと唱えた。

「レイラ? 笑顔の裏に何か見えるよ?」

「何か今日のレイラ怖い……………」

「大丈夫ですよ。あなたたちには危害を与えませんから」

「二には、つて何!?!」

双子が騒いでいると、グリフィンボールの生徒も続々と寝室から出てきた。その一人一人が大丈夫?と声をかけてくれる。全員に心配かけてるじゃん。

「あ、おはよーレイラ」

「調子はどう?」

ハリーとロンが、欠伸をしながら談話室にやって来た。特にハリーは眠そうだ。



「おはようございます。私は元気ですが、ハリー？あなた何かありましたか？」

笑みを浮かべてハリーに問いかける。すると、近くにいた双子が声を揃えて言った。

「気を付けろハリー。レイラが笑顔の時は正直に答えた方がいい。殺されるぞ」

「えっ!？」

ハリーの顔が青ざめる。

やだなあ、そんなことしないよ。殺すだなんて滅相な。機嫌がいいときは手加減するって。多分な。

朝食を食べているとき、ハリーから話を聞いた。どうやらハリーは昨晚、家族に会ったという。話を聞くと、それは原作でいう、『みぞの鏡』とやらだった。

「興味深いですね、今晚、行ってみますか」

レイラ達は小一時間寒い廊下をさまよった後、ようやく鏡の部屋を

見つけた。ハリーがマントをかなぐり捨てて鏡へ向かう。レイラも『目くらまし術』を解いた。

鏡の上にはこう書かれていた。

『すつう をみぞの のろここ のたなあ くなはで おか のたなあ はしたわ』

(へえ、『私は貴方の顔ではなく貴方の心の望みを映す』か。ふうん)

「ねっ?」

「僕、君しか見えないよ」

鏡の前に立ったハリーとロンが喋っている。

「ちやんとみてごらんよ。さあ、僕のところ立って見て」

ロンとハリーが場所を交代する。

「うわあ!僕を見て!」

とロンが叫ぶ。

「家族みんなが君を囲んでいるのが見えるかい?」

「ううん・・・僕一人だ・・・でも僕じゃないみたい・・・僕、首席だ!寮杯とクイディッチカップも持つてる。僕、クイディッチのキャプテンもやってるんだ・・・。ねえハリー、これって未来を映す鏡?」  
「そんなはずないよ。僕の家族は皆死んじやったもの」

レイラはそんな2人に声をかける。

「2人とも、鏡の上の文字を逆から読んでください」

2人はレイラに言われた通り、文字を逆から読む。

「『わたしは あなたの かお ではなく あなたの こころの のぞみを うつつ』?」

「つまりこの鏡は家族を映す物でもなければ未来を映す物でもありません。心の中の望みを映し出すのです。ハリーは家族に会いたい、ロンはお兄さんたちと同じ様な栄光を掴みたい、そういうことですよ」

「・・・」

「ですが、その鏡に映し出されたことはあくまで望みでしかありません。けっして現実では無いんですよ。でも、その望みだつて実現できないとは限りません。現実で一生懸命頑張つて、それを実現すればいいんですよ」

「・・・」

「じゃあ、私も覗いてみましょうか」

レイラは鏡の前に立った。そこに映っていたのは・・・

「わあ凄いですね」

レイラの後ろで、笑顔で手を繋いでいるハリーとドラコ。それにヴォルデモートとダンブルドア。グリフィンドールとスリザリン。死喰い人と不死鳥の騎士団。

(私の望みは壮大だなあ)

自分の無茶苦茶な望みに苦笑しながら、レイラは自分の隣に立つ人物に目を向けた。

「っ!？」

そこにいたのは、現世の自分と

その自分が死ぬ直前に喧嘩してしまった、仲の良かった親友だった。

【2005年 6月 日本】

私の名前は近衛 黎。日本の中学2年生だ。今日も剣道部の副主将として、部員の皆と一緒に練習をしていた。人付き合いが苦手な私は、部員のなかにいる私の親友、久遠 渚の誘いで剣道部に入った。初心者だった私に、渚は丁寧に教えてくれ、お陰で今では副主将になるほど腕前は上達した。今日も部活が終わったら、渚と一緒に下校する、はずだった。

「ちよつといいい?・黎」

部活が終わった後、部室の後片付けをしていると渚が声をかけてきた。

「どうしたの?」

いつも通り笑顔で答えると、渚は私を睨んで言った。

「あんたさ、私の事鬱陶しいとか、目障りとか色々言ってくれてんじゃないか」

「えっ?」

「しらばっくれんな。佑奈から聞いたよ」

渚が口にしたのは、私には言った覚えのない言葉だった。どうやら、クラスのお嬢様の存在の北島 佑奈が、私が渚な悪口を言ったと、渚に伝えたらしい。

「私が渚の悪口を?言うわけないよ、せつかくできた親友なのに」

「笑わせないで。何で影でこそこそ言うのよ」

「だから言っていないってそんな事」

何度言っても渚は信じてくれない。流石に嫌になってきた私は、つい言っていないけないことを言ってしまった。

「ねえ、何度言ったら信じてくれるの!?北島さんのことは信じるのに私の事は信じてくれないの!?何でよー」

「黎こそ何で陰口叩くのよ!!」

「だから言っていないって!もう、渚の強情者!だいつきらい!!」

言ってからハツ、となった。恐る恐る渚を見ると、涙を流しながら嘲るような笑みを浮かべていた。

「ほら、言ったじゃん。だいつきらいって。私もあんたの事なんか大嫌い!!もう話しかけないで!!」

そう叫んだ渚は部室の扉を押し開けて、外に飛び出した。私は呆然としたままそれを見送ってしまった。

私は深く後悔した。自分の言葉が信じられなかった。

「……っ！ねえ！渚待って!!!」

自分も部室から飛び出すと、渚は校門に向かって走っていた。それも必死に追いかける。校庭にポツポツと雨が降りだした。

「なぎさあああ!!」

私は涙声で叫んだ。きつと、雨と涙で顔はぐしゃぐしゃになっているだろう。だがそれどころじゃない。

私はやっと校門に着いた。ゼイゼイと息をしながら、辺りを見渡す。すると、近くの交差点で渚を見つけた。

「なぎさ……」

声をかけようとしたその時、1台のトラックが交差点に侵入した。その先には横断歩道を渡っている渚。

私は考えるよりも早くに走り出していた。その勢いのまま、交差点の真ん中で止まってしまった渚を押し飛ばす。

最後に見えた景色は、恐怖心で顔が強張っているような、私の行動に驚いたような、そんな顔の渚だった。

「渚・・・あなたは助かったかな、ちゃんと生きてるかな。仲直り出来なくてごめんなさい。私は今ハリポタの世界で生きているんだ。渚、君もどこかの世界で生きているよね、後悔なんてしなくていいからさ・・・」

レイラは日本語で呟いた。その目には後悔の色が映っている。だが、鏡の中の渚はにこにここと微笑むままだ。

「レイラどうしたの？大丈夫？」

ハリーの声で、レイラは我に帰った。

「え、ええ大丈夫です」

「本当？君、真っ青だよ？何を見たの？」

「・・・ごめんなさい。言えないんです」

「そう・・・分かったよ、帰ろう」

そう言って歩き出そうとするハリーを呼び止め、入り口付近の机に座っている人物に声をかける。

「校長先生、こんばんは。そこにいるのはわかっていますよ？」

ハリーとロンが怪訝な顔でレイラを見る。その時、

「ほう、よく見破ったのう。こんばんは、3人とも」

そう言って突然現れるダンブルドアに2人は仰天していた。ダンブルドアは面白そうに笑うと、レイラに問いかけた。

「いつから気づいておったのじゃ？」

「この部屋に入ったときからです、ダンブルドア先生」

「素晴らしい。グリフィンドールに5点あげよう。ところで・・・君は何を鏡の中に見たのかね？」

「グリフィンドールとスリザリンが仲良くしていたところですね。他は、まあ似た感じの事ですよ。・・・それから先は言えません」

「そうか、残念じゃの」

そういつつ『開心術』を使ってくるダンブルドアには苦笑する。

「私にそれは効きませんよ。」

「そのようじゃ。・・・さてレイラ、この鏡については先ほど君の述べた言葉が満点回答じゃ。この鏡は望みを映してくれるが知識や真実を示してくれるわけではない。だが過去にはそれを受け入れられず、発狂してしまったものもある。3人とも、この鏡は明日よそへ移す。探してはいけないよ。だがもし再び出会ったとしても、もう大丈夫じゃろう。夢にふけったり、生きることを忘れてしまうのはよくない。それをよく覚えておきなさい。さて、ベッドに戻ってはいかがかな」

「あの・・・先生。質問してもよろしいですか？」

ハリーが躊躇いながら言った。

「いいとも」

「先生はこの鏡で何が見えるんですか？」

「厚手のウールの靴下を一足持っているのが見える。靴下はいくつあってもいいものじゃ。」

ハリー達は透明マントをかぶり、レイラは自分に『目くらまし術』をかける。そのまま寮に戻り、ベッドにもぐりこんだ。



## ハグリッドのドラゴン

年が明け、新学期になった。

レイラは「みぞの鏡」のことを忘れようとしたが、無理だった。毎晩、日本の夢を見たのだ。しかも、渚と喧嘩した場面ばかり。渚は無事だっただろうか？ちゃんと助けられただろうか。……生きていて欲しい。

ハリーも鏡のことを忘れられないようで、両親が高笑いとともに消え去る夢を何度も見ているらしい。

そんな中クイディッチが再開され、ウツドのしごきは前よりも厳しくなった。次のハッフルパフ戦にはグリフィンドールの7年ぶりの優勝がかかっているのだ。

ひとときわ厳しい雨の日、ウツドが悪い知らせを持ってきた。レイラはフレッドとジョージが急降下爆撃を互いに仕掛け、箒から落ちるまねをしているのを見て、その2人目掛けて糞爆弾をぶつけた。双子はその衝撃で本当に箒から落ちた。

「ふざけるのはやめろ！そんなことをしていると、今度の試合には負けるぞ。次の試合の審判はスネイプだ。スキあらばグリフィンドールから減点しようと狙ってくるぞ」

「スネイプが審判だって？」

双子が口いっぱいのドロを吐き散らし、レイラに非難がましい視線を向けつつ言う。

「スネイプの奴、僕達がスリザリンに勝つかもかもしれないとなったら、

きつとフェアじゃなくなるぜ」

「フレッド、スネイプ先生はそんなことをする人ではないと思いますよ。それに誰が審判をやるにせよ、つけこむ口実を与えないようフェアプレイをするのは当たり前のことです」

レイラは一応反論したが、チームの誰もが疑わしいといった面持ちだった。

「レイラの言うとおりで。僕達は付け入る隙を与えないよう、絶対にフェアプレイをするんだ」

グリフィンドール生ってほんとにスネイプ（スリザリン）のこと嫌いなんだな。

練習の後、談話室にまつすぐ戻った私とハリーはチェスをしていたハーマイオニーとロンに話しかけた。

「スネイプが審判をやるんだって」

ハリーがそう言うのとロンとハーマイオニーはすぐに反応した。

「試合に出ちやダメよ！」

「病気だつて言えよ」

「足を折ったことにすれば？」

「いや、いつそ本当に折ってしまえ」

ロンとハーマイオニーが色々な案を出す。でもね、2人とも、

「シーカーがいなくなったらグリフィンドールはプレイ出来なくなりますよ」

「そっだよ。シーカーに補欠はいないんだ」

レイラに続けてハリーは青い顔で言った。

そして試合の日。ハリーが前代未聞の速さでスニッチを掴み、ゲームは終わった。グリフィンボールの優勝が決まった、記念すべき瞬間だった。だが、ハリーが試合後に、スネイプがクイレルを問い詰めているのを見た、と言ってきた。3人はすっかりクイレルが脅かされていると信じ込んでいたので、レイラは反論するのがめんどくさくてほっておいた。だが、「賢者の石」を守らなくてはならないというところでは一致した。

だが、学生の悲しさとして、石ばかりに気を使うわけにはいかなかった。学年末試験が迫っていたのだ。ハーマイオニーは10週間前だというのにすさまじい勢いで勉強し、しかもそれをロンやハリーに対してでも要求していた。レイラには全く言っただけなので恐る恐る聞いてみると、あきれたような表情でこう返してきた。

「だって貴方なら今受けても全教科満点取れるでしょう?」

「多分そうですね」

そばにいたロンとハリーがお化けでも見るような目でこちらを見してきた。泣いていいかなあ。

「2人とも、そういうことですからわからないことがあったら何でも聞いて下さい」

だが、レイラがこう続けると2人の視線は一転、救世主を見るかのようだ。

「うわあ！ありがとうございます！僕『魔法薬学』を教えて欲しい！」  
「僕も！」

ロンとハリーは歓喜の叫び声をあげた。レイラの試験勉強はこうして始まった。

先生達もハーマイオニーと同意見のようで、イースター休暇にはどっさりと宿題が出た。現に今も図書室でハリー達3人は宿題をしている。え？レイラ？宿題そんなものもらった日に終わったよ。

あくる日図書館で4人で勉強していると、ハグリッドが来た。何故かバツの悪そうにもじもじとしている。ハリー達は「賢者の石」について聞こうとしたが、あとで小屋に来るように言われただけだった。

小屋に行ってみると、中は窒息しそうなほど暑かった。暖炉では火がぼうぼう燃え、その真ん中には大きな黒い卵があった。ほう、原作通りですね。

ハリーは入るなり、ハグリッドに石の護りについて尋ねていた。ハグリッドは何人かの先生の名前を挙げ、それぞれに罫をしかけたこと、犬のあやし方は自分とダンブルドアしか知らないことを語った。話に区切りがついたと思ったとき、レイラはハグリッドに質問した。

「ハグリッド、あれはどこで手に入れたんですか？あなた、これがばれたらアズガバン行きですよ」

「賭けに勝ったんだ。昨日の晩、村まで行って、酒を飲んで、知らな

い奴とトランプをしてな。はつきりいってそいつは厄介払いできて嬉しそうだったがな。」

まったく……知らない奴とトランプなんて私には出来ないよ。

「ハグリッド？どんなやつだったのですか？」

「わからんよ。マントを着とったからな」

「何かホグワーツについて話しましたか？例えばフラッツフィーについてとか」

「うーん、話したか……うんにや話してないかも……」

ハリーとロン、ハーマイオニーはレイラの質問の意図がわからない様子。

「全く……それくらい覚えておいて下さいよ。レジメン<sup>開</sup>ス」

レイラは『開心術』でハグリッドの昨日の晩の様子を見た。ぼつちり3頭犬の対処法をマントの男に漏らしていた。

「ハグリッド。あなた、昨日の夜マントの男に犬の対処法を漏らしましたね？」

「まさか。言うわけがねえだろう。」

「とぼけないで下さい。私は先ほど『開心術』でああなたの昨日の様子を見せてもらいました。まったく、『ドラゴンなぞフラッツフィーに比べりや楽なもんだ。もつともフラッツフィーは音楽きかせりやおねんねしちまうがな』ですか」

レイラがそう言うと、ハグリッドは驚いたようだったがあまり気にしていない様子。おい少しは気にしてくれよ。

「ねえレイラ、何がそんなに問題なの？」

ハリーとロンが首をかしげて聞いてきた。

「考えても見てくださいよ。もともとドラゴンが欲しくてたまらなかつたハグリッドのところ、そんなに都合よく法律違反のドラゴンの卵を持った人間が現れる訳ないでしょう？」

「「あっ！」」

ハグリッドとハリー、ロンがやつと気がついた。

「そいつはおそらく『賢者の石』を狙う何者かですよ」  
「スネイプだ！そうに違いない」

とハリー。

「とにかく、ハグリッド。その卵は一度火にかけてしまったのなら取り出すわけにはいきません。なので、ロンの兄のチャーリーに引き取ってもらいますよ」

レイラは紅茶をすすりながら言った。

「でも……」

「でも、じゃありませんよ。ハグリッド？」

ハグリッドが何か言いたそうにしていたが、レイラの笑みを浮かべた顔を見て、身震いをして黙ってしまった。

「ホントにその笑顔怖いね……」

ハリーが口をひきつらせながら呟いていた。

ある朝、いつものように朝食を食べていたレイラに、追突してきたものがあつた。レイラのフクロウのルナだ。ルナは、ハグリッドからの手紙を持ってきていた。たつた一行、こうかかれていた。

《いよいよ孵るぞ》

レイラ達4人は午前中の休憩時間にハグリッドの小屋へ出かけた。

「もうすぐ出てくるぞ」

ハグリッドは興奮した様子だった。

卵はテーブルの上に置かれていた。やがてピシツという音とともに殻が割れ、ドラゴンの赤ちゃんが出てきた。ハグリッドは感動していた。

そこでレイラは忘れていた。原作での大量失点の原因になるフラグに。

突然、ハグリッドが弾かれたように立ち上がり、窓際に駆け寄った。

「あ、」

(やべ)

その動作でレイラは原作のフラグを思い出した。そしてこめかみを押さえてため息をつく。案の定、窓から覗いていたのはドラコだった。

「はして……」

あれから何週間かたったある日、ハグリッドのドラゴン（ノーバートと名付けられた）の餌やりを手伝っていたレイラとロンが顔をしかめながら談話室に帰って来た。おまけにレイラはロンに担がれている。

「まあ！どうしたのその腕！」

2人の腕を見たハーマイオニーがハッと息をのんだ。レイラは腕を、ロンは手を血だらけのハンカチでくるんでいた。

「あー、ノーバートが禁<sup>私</sup>じられた森<sup>友</sup>の生き物<sup>達</sup>を傷つけようとしてたから、庇おうとして杖を取り出したらハグリッドに怒られました………そしたらその間に、友達を庇ってくれたロンが手を噛まれて……」

「レイラが僕の手を治してくれようと必死になってくれてたところをノーバートがレイラの腕を噛んだんだ」



ソファアに下ろしてもらったレイラがアハハ、頬をかきながら笑った。ロンはぶつくさとノーバートに対する愚痴をハリーに言っている。

「ロンの手は止血まで出来たのですが、魔力がそれで尽きちゃいました。……全く、ドラゴンというものは面白いですね」

「面白くないでしょー!」

魔力が尽きたお陰で動けなくなったレイラをロンが運んでくれたらしい。

それを聞いたハリーとハーマイオニーは心配そうな顔で2人を見る。とそこへ、ヘドウィックがやって来た。どうやらチャーリーからの手紙を持っているようだ。土曜日の真夜中、一番高い塔でノーバートを引き取ってくれるらしい。原作通りだとロンは行けないが、今回はレイラも行けなくなりそうだ。

翌朝、魔力が半分くらい回復したレイラは、自分の腕を見て思わず顔をしかめた。腕が通常の2倍ほどに晴れ上がっている。ロンもそのような状態になっていたので、治してあげようか?と言うと、また魔力切れられたら困る、と言って笑っていた。

だが、昼過ぎにはそんなことを言っていられない状態にまで進化していた。思わず叫び声をあげそうになったハーマイオニーに引きずられ、医務室まですっ飛んでいくことになった。

「全く、あなたは何回医務室にすれば気が済むのですか?」

「本当にすみません……」

マダム・ポンフリーに小言を言われながらも、レイラはベッドに横

になった。そして、そのまま魔力を回復させるために、レイラは寝てしまった。

そう、次の朝までずっと。

## 減点と罰則と動物と

翌日、寮の得点を記録している大きな砂時計のそばを通った生徒たち、特にグリフィンドール寮生は真つ先にこれは掲示の間違いだと思つた。グリフィンドールの点が150点も減つていたので。

彼らは真つ先に事の真相を探つた。

レイラは勉強に関しては群を抜いて飛び抜けていたし、先生方からよく褒められ、クイディッチでも活躍をし、また遊び感覚で結構の得点を獲得していた。

にも関わらず、砂時計からわかるグリフィンドールの得点は、一五〇点も減つていたので。そして噂が広がり始めた。

ハリー・ポッターが、あの有名なハリー・ポッターが、クイディッチの試合で二回も続けてヒーローになったハリーが、寮の点をこんなに減らしてしまったらしい。何人かのバカな一年生と一緒に。

その噂を聞いた時、レイラは思わず自分の頬を殴つた。周りにいた

生徒がギョツとして見てきたがレイラは構わず、後悔をしていた。自分ならこれを食い止められたかもしれないのに。

盛大にため息をついたレイラを見て、隣を歩いていたハリーとハーマイオニーはビクツとなった。

二人揃ってレイラに愛想をつかれた等と考えていたのだが、レイラは片手で額を押さえて

「すみません、ハリー、ハーマイオニー」

と謝った。

何でレイラが謝るんだ、と思った二人だったが、ドンヨリとした雰囲気を出すレイラに声をかけられずにいた。

そして、試験の日が近づいてきていたある水曜日の夕方。試験勉強に没頭していたハリー、ハーマイオニー、ロン、そしてレイラの元に、  
一羽のフクロウが飛んできた。

「ルナ！」

コツコツと窓ガラスをくちばしで叩くレイラのフクロウ、ルナはレイラに窓を開けてもらおうとスイーと部屋に入ってきた。そしてレイラの肩に止まると手紙が括られた右足を彼女につき出した。

「誰からでしょう……っ!?!」

手紙を読んだレイラは目を見開いた。

「何て書いてるんだ？」

教科書とにらめっこしていたロンが顔を上げてレイラに問うが、レイラはグシヤツと手紙を潰して、

「すみません、少し用事ができたので……」

とだけ言って、談話室から慌てたように駆け出していった。

シトシトと静かに雨が降る中、レイラは傘も差さずに禁じられた森への道を走っていた。

丁度日は空の向こうへ消え、辺りはだんだんと暗くなりつつあった。

「ハグリッド！」

レイラは森の入り口で待っていた大きな人影に声をかけた。その人影は振り向くとレイラに向けて手を振った。

「すまねえ、レイラ。こんな時間に」

「いえ、大丈夫です。それより本当なんですか？ユニコーンが、、、死んでしまったというのは」

レイラが息を整えながらそう言うと、ハグリッドは辛そうに顔を歪めて、ああ、と頷いた。

「そう、ですか」

レイラは俯いた。

ハグリッドからの手紙には簡潔に書かれていた。

”ユニコーンの死骸を見つけた

俺は今から埋葬しようと思う”

「ルーモス<sup>光</sup>」

ハグリッドに続いて森に入ったレイラは鬱蒼としげる森の一角、開けた場所にその死骸を見つけた。

ひどく美しく、悲しいものだった。

純白に光輝くたてがみとそのしなやかな足は無造作に散らばっている。

周りの木や地面には沢山の血が飛び散っていた。

苦しかっただろうか。

痛かっただろうか。

辛かっただろうか。

何も出来なかった自分が情けなかった。

いつの間にか周りには沢山の動物達が集まってきた。皆、心なしか悲しそうな顔をしている。

「ハグリッド、ユニコーンを殺した者に心当たりはありますか？」

森の出口へと向かっている途中、レイラは唐突にハグリッドに聞いた。

「うんにゃ、俺には分かん」

ハグリッドは首を振って答えた。  
いつの間にか雨はやんで、雲の隙間から白銀に光る月が覗いている。

「そうですか……」

それっきりレイラは黙りこんだ。  
険しい顔をして、どこかを睨むように目を細めながら。



「・・・・・・・・・・ヴォルデモート」

朝食のテーブルでレイラはポツリと呟いた。その言葉に隣に座っていたハリーがブハツと口に入れていたパンケーキを吹き出す。

「急に何言い出すんだよー！」

ゲホゲホと咳き込みながらハリーがレイラを見ると、一瞬レイラはキョトンとした顔をした。そして、

「あ、ああ。すみませんハリー。少し考え事をしていました」

と、苦笑して謝った。

「一体何考えてたらヴォルデモートなんて言葉が飛び出てくるんだ・・・・・・・・」

ハア、とため息をついたハリーが新しくパンケーキを取ろうと椅子から立ち上がる。と、そこへハリー目掛けて何かが突っ込んできた。

「グフツ」

ハリーの横腹に命中したそれは学校のフクロウだった。

「……………痛い……………」

呻くハリーの代わりにレイラはフクロウから手紙を受けとった。

「処罰の詳細です、ハリー」

「……………あ」

「忘れていたでしょう？」

「……………うん」

ハリーは素直に手紙を読んだ。

同じような手紙がハーマイオニー、ネビル、ドラコにも届いていた。

夜11時。ハリーとハーマイオニーは談話室でロンとレイラに別れを告げ、ネビルと一緒に玄関ホールへ向かった。

三人がドアの向こうに消えたと同時にレイラは自分に『目眩まし』の呪文をかけた。そして、談話室から飛び出した。

「じゃあレイラ、僕らはチェスでもして待っておこ……あれ？」

ロンは今さっきまで隣にいたはずのレイラが一瞬のうちに消えたことに目をパチクリさせた。

「ハグリッド。ハグリッド！」

レイラは『目眩まし』を解いてハグリッドへ声をかけた。

「レイラじゃねえか！」

ハグリッドは驚いたように声を上げた。ハグリッドの隣でいたファングが嬉しそうにレイラに近づく。

「こんなところでいってえ何してるんだ!? もう遅いから城へ帰り……」

「これからハリー達が処罰を受けるために森へ行くのですよね」

レイラはハグリッドの話を遮って早口に言う。

「私の勘ですが、ユニコーンを殺したのはハグリッドが考えている奴よりもっとヤバイです。恐らく彼らでも今の奴には敵わないでしょう」

フアングがはしゃいだようにグルグルとレイラの周りを回る。

レイラは禁じられた森を見つめた。

「だから私も連れて行ってください。彼らがしなければならぬことを出来るだけ早く終わらした方が良いと思うので」

森の中を覗き込んだレイラに一陣の風が吹き寄せる。

と、そこへ城の方から何人かの声が近づくのが聞こえた。

「隠れておれ、レイラ」

素早くハグリッドがレイラを小屋の後ろへ押しやる。レイラは素直に小屋の後ろへ隠れた。

遠かった声がだんだんと近づいてくる。今言い合っているのはハグリッドとドラコだろう。

「ルーモス<sup>光</sup>」

小声で呟いたレイラは、一つの灯りが城の入り口に消えたのを確認して小屋の影から出てきた。

「やあ、久しぶりですね。ハリー、ハーマイオニー、ネビル、ドラコ」  
「レ、レイラ!？」

ハーマイオニーが驚いたように声を上げる。そしてレイラに抱きついた。

「何でここにいるの!? 早く帰りなさい!」

「と言ってる割には離してくれないんですね、ハーマイオニー」

ギユウウと両手で抱きしめてくるハーマイオニーに苦笑しながらレイラは彼女の背中をポンポンと優しく撫でる。

恐らく、この頭の良い少女はホグワーツに関する本を全て読んでいるはずだ。そして”禁じられた森”の恐ろしさも知っているのだろう。

少し震えているハーマイオニーをレイラは少し考えた後、抱きしめ返した。

そんな少女二人を三人の少年が羨ましそうに見つめていた。

「そんなじゃ、ハリーとハーマイオニーは俺と一緒にいこう。ドラコとネビルとフアングと一緒に別の道だ。レイラは一人で大丈夫だよな？」

「大丈夫です」

ハグリッドからするべきことを大方聞いたレイラはコクリと頷いた。そんなレイラをハーマイオニーが心配そうな顔で見る。

「じゃ、気を付けろよ。」

—— 出発だ ——

ハグリッドの掛け声にレイラはハーマイオニーの方へ微笑みかけた。

「行ってきますね」

その言葉と同時にレイラは深く踏み込んで地面を蹴った。

「そうですか、ありがとうございます」

レイラはケンタウルスに礼を言つて軽く息を吐いた。

「今のところ有力な情報はありませんね……」

うくん、と顎に手を当てて次に行くべき場所に検討をつけようとレイラは考え込んだ。

そんなレイラの背をニフラーがよじ登っている。足元ではオーグリーやオカミーが遊んでおり、頭ではデミカイズがゆったりと休憩していた。

そんな彼らに苦笑しながらレイラはよし、と足を止め、左を向いた。

「あっち行きますか」

再び歩き始めたレイラは足を進める度に体が重くなっていくのを感じた。小さな動物達が置いてかれまいとレイラの体に乗っかってきた。

少し歩くと木々の隙間からチラチラと何かが光るのが見えた。

ちようど良かった。合流するか、と考えたレイラはその光に近づこうと木々や草むらを避けながら歩いた。

そして、その光を放っていた二人の少年に声をかけた。

「ネビル、ドラコ、そっちはどう

「ぎぎ、ぎやあああああ  
!!!!」

レイラの姿を見た二人は大声で叫んだ。

顔を青白くさせたネビルが赤い火花を空へと打ち上げるのが見えた。